

『新・おねーさんの耳はロボの耳4』

著作 a s h

この作品は『To Heart』（リーフ・ビジュアルノベルシリーズVOL.3）を元としています。

十二月。

巷ではあちこちに電飾が華やいだ様子を見せ始めるころでもある。

クリスチャンの国でもないのに、なぜかクリスマスだけは一つのイベントとして定着してしまっているが、この際それはどうでもいい。要は楽しめることがあればそれでいいのだ。

そして、それはここ藤田家にもやってくる、はずなのだが…。

「なんだってえ？」

その時、浩之は電話口で大きな声を上げていた。もちろん、オーバーなジェスチャー付きで。

その声の大きさにマルチが驚いたような表情を見せながら、浩之の方すなわち電話の置いてある玄関の方にやってきた。

「あの一、どうかしたんですか？」

すると浩之はマルチには「なんでもないよ」と手振りで伝えながら、電話口でさらに大きな声を続けた。

「まったく、帰れないとか言って、そっちはそっちでやるのはいいんだけどさ、生活費が入ってないんだよ、今月の生活費！……なに、忘れただってえ？親父い！」

電話の相手は浩之の父親であったが、そもそもは十一月の末になっても生活費がいつもの口座に振り込まれなかったので、浩之がこうして電話をかけたと言う次第である。

かくして、そのあげくに「今年いっぱいには家に帰れない」と言うことを言われただけでなく、「振り込みを忘れた」と告げられてしまったのだ。

「とにかく生活費だけは振り込んでくれよな！」

怒鳴るように言い捨てながら浩之が乱暴に受話器を戻すと、かたわらには心配そうに見つめるマルチの姿があった。

「な、なんだよ、マルチ？」

「今の電話……なんだったんですか？」

「あ、ああ、生活費が入ってねえって親父に言ったんだけどね」

「それで、どうして怒ってるんですか？」

「どうしてもこうしても……親父とぎたら『忘れてた』のひとことだったんだぜ？ おまけに年内は帰ってこないときさ。まったく、息子のことをなんだと思ってるんだ」

「きっと忙しかったんですよ……帰ってこれないのは少し寂しいですけど」

「ふう、両親そろってこれだからな、家は……」

「浩之さん……」

「ま、俺には二人がいるから、寂しくはねーけどな」

二人と言うのはもちろん、ここにいるマルチと、今は姿を見せないセリオのことで

ある。

「ところでセリオは？」

「あ、セリオおねーさんはお買い物です」

「れ？ お金残ってたっけ？」

マルチの返事に思わず疑問を感じた浩之だったが、それは無理もない。と言うのも、先に言ったように生活費がいつも通りには振り込まれていないのだ。ゆえに金が残っていると
は思っていなかったのだ。

「はい、それはセリオおねーさんが…」

とマルチが説明を始めようとした時、玄関のドアが開き、セリオが姿を見せた。買い物袋代わりの大きなトートバッグを左手に提げて。

「ただいま。つて、二人ともどうしたの？ こんなところで」

帰ってくるなり、玄関のそばに立っている浩之とマルチの二人を見て、セリオは苦笑を浮かべた。

「あ、おねーさん、お帰りなさい」

「よう、お疲れさん。ちょうどいいや」

「ちょうどいいって？」

浩之の言葉の意味がよく分からなかったセリオがかすかに首を傾げると、浩之は笑いながら、セリオの左手のバッグをつかんだ。

「まあ、それは上がってからだな」

そしてしばらく後。

買い物の内容をあらかた整理し終えてセリオが居間に行くと、浩之がマルチの入れてくれたコーヒーを飲みながら待っていた。かたわらにはお盆を持ったマルチもいる。

「それで、なにがちょうどよかったの？」

浩之とは別のソファに腰を下ろしながらセリオが尋ねると、浩之もカップをテーブルに置いた。

そして、浩之とマルチの二人が同時にしゃべりだした。

「ああ、生活費が振り込まれてないから、今月はぼちぼちやばいんじゃないかと思ってただけだよ。それで、さっき親父に電話したんだよ」

「わたしが『セリオおねーさんはお買い物です』って言ったら、浩之さんに、『金が残ってたっけ?』て訊かれたので、それに答えようとしたら…」

普通ならばこうした状態で話の主旨が理解できるはずがない。だが、セリオにとってはそれは造作もないことである。浩之とマルチの言葉がほぼ同時に切れた時には、さっきの状況を正確に把握していた。

「なるほどね…。二人の言いたいことは分かったし、浩之さんの訊きたいことも分かったわ」

「で? 本当のところ、お金残ってたのか?」

藤田家にはセリオとマルチの二人のメイドロボがいるが、家事についてそのどちらが仕切ってるのか、言うまでもない。基本作業は分担している二人だが家計や全体的な作業を仕切るのはセリオである。浩之は家計に直接口を挟んだことがなく、ただ月々の小遣いをもらう程度なのだ。セリオが来る以前の適当に使っていたころより、自分の懐が寂しくな

りはしたものの、月を通してちゃんとした生活ができるようになっていた。

「生活費の方のお金は実のところ、残ってないの。いつも最初に浩之さんの自由にできるお金をはずしてから、家計を立てるんだけど、先月から少し予定外の出費が重なったおかげで、今日現在の繰り越しはゼロよ」

「え？ それでどうして買い物？ まさか、今日の買い物が最後だった？」

「違うわよ。生活費の方は確かにゼロなんだけど、それとは別に用意してあったお金があるのよ」

「それとは別って、一体…」

わずかに怪訝そうな表情を見せる浩之だったが、セリオは屈託のない笑みでそれに答えた。

「別のって言っても、危ないお金じゃないから安心してちょうだいね。へそくりって言えばそれに近いとは思うけど…」

セリオの言いぶりから察するに、それはへそくりではないことくらい、浩之にも悟ることができた。家計の方で万一のために取っておいた分も、予定外の出費とやらで消えてしまったはずなのだから。

（セリオのやつ、一体どこからお金を…。例のテストがらみかな？ まあ、セリオが言わないなら、あえて追求することもないか…）

とその素性が気になりはしたものの、セリオが自分から言わない以上はあえてその場でそれ以上の追求をしない浩之だった。

ちなみに、一月ほど前からセリオは山本との関係する、あるテストに協力しているのであ

る。内容は聞かされていないが、その時間も浩之が大学に行ってる間に限られていることもあって、浩之も快諾していた。

「ま、なにはともあれ、これでクリスマスが無事に過ごせるってなもんだよな？」

わざと軽い調子で言う浩之に、セリオもマルチも笑ってそれに答えるだけ。

「そうですねー」

「浩之さんで本当にお気楽なのねえ」

こうして、楽しそうに笑う三人だったが、それぞれの心中は必ずしも笑ってはいなかった。

翌日。

浩之が大学に顔を出すと、いきなり大学の遊び友達から声をかけられた。

「よお、藤田！ ちょうどいいところで会ったな」

「なんだよ、ちょうどいいって？」

浩之が怪訝そうにすると、遊び友達は浩之の肩に顔を乗せるようにしながら告げる。

「コンパだよ、コンパ。お前も行くんだろ？」

「いつ？」

「クリスマス」

「へえ？ そんな日にやるのか？」

「…の一週間前。当日はみんな彼氏や彼女と一緒にするのが多いからな」

「当たり前だって。俺だってクリスマスは…」

「例の『かわいいメイドロボ』とか？」

「殴られたいらしいな？」

「みんな言ってるけどね……。ま、とにかく参加ってことでいいな？」

と言うと遊び友達は浩之の返事を聞かずに走り去っていった。

「お、おい！ ……ま、いいか。どうせクリスマス当日じゃないだし！」

クリスマス当日はもちろん自宅でセリオやマルチと一緒に過ごす、そんな腹づもりだった。当日の予定は空けておかなければいけない。が、それ以外となれば、こうしたつき合いもたまには必要……と言うのがその時の浩之の本音だった。

それに、生活費の振り込みがなかったものの、浩之自身はそれほど困窮してはいなかったのだ。と言うのも、セリオが十二月を前にした時に、「なにかと入り用になるでしょうから」と小遣いを多めにくれていたのだ。当面の生活費の問題もクリアしてるし、遠からず振り込みがされるはずだから、自分の手持ちの金は有効に使いたいと思うのは、浩之ならずとも然り。

（せっかくセリオが多めにくれたんだから、使わない手はないよな……）

とすっかり、昨日セリオのお金の出どころを気にしていたのを忘れていたのを始末である。が、その時になって、ふと大事なことを思い出した。

（あ……、クリスマスプレゼント……用意してないや……）

一体いつから「クリスマスにプレゼントをする」と言う慣習ができたのか、そんなことはともかくとして、クリスマスにプレゼントをしようのは割と当たり前……と言うか、このような機会でもなければプレゼントすること自体が少ないのかも知れない。

（日頃から二人には世話になってるから、なにかちゃんとした物を贈りたいけど……。予算

が足りるかどうかな、問題は」

その日、講義の間じゅうずっと浩之は二人へのプレゼントについて思案を巡らせていた。が、結局うまい結論は見出せないままに終わってしまった。

（やれやれ：コンパや忘年会とか考えると、あまり余裕がないしな：とは言っても、適当な物でお茶を濁すのもなあ）

コンパなどのつき合いを減らせば資金は十分にある。つまり、浩之は二兎を追っていたわけだ。そして、それは皮算用で解決を見た。

（そう言えば、昨日振り込めって言ったばかりだけど、そのうち金が入るじゃないか。そうすれば、資金も多少増えるはずだな？）

と言う具合に。しかし、数日後には、それが本当に皮算用でしかなかったことを思い知るのである。

数日後。

浩之が帰宅すると、苦い表情のセリオが待っていた。

「なんだよ、セリオ」

ふと気づくと、マルチも同様に苦い表情だった。

「それに、マルチまで…」

「浩之さん、今日お金が振り込まれてただけ…」

セリオが苦笑混じりにしゃべりだすと、途端に浩之の表情が明るくなった。

「おお！ やつときたのか。で、今月の小遣いはどれくらいくれるのかな？」

だが、浩之とは反対に、セリオとマルチの表情は苦いまま。

「あのね、浩之さん」

「ああ」

焦らすようなセリオの口調に、浩之はまだ事態の本質を見抜いていなかった。そして、セリオが簡潔にそれを告げる。

「今月はないの」

「は？」

「だから、今月は生活費以外のお金はないの」

「ど、どーゆーことだよ？ お金が振り込まれてたんだろ？ それでないってのは納得いかねーな」

明らかに憤慨してる様子を見せる浩之だが、そう言われても困るのはセリオとマルチの方なのだ。

「あれこれ説明するよりも、これを見てもらった方がいいでしょ」

とセリオが通帳を差し出した。

「どれどれ……げっ……」

浩之が帳面を見ると、確かに一月の生活費の最低分くらいしか振り込まれていないことが分かった。これでは自分の小遣いどころではないことくらい、浩之にも納得できる。

「な、なんで……これだけしか……」

「それについては……マルチから説明聞いてくれる？」

「え？」

と浩之が帳面からマルチの方に視線を移すと、マルチは困ったような表情のまましゃべ

り始めた。

「はい…あの、今日の昼に電話があったんです。浩之さんのお父様から……」

「で？ 親父のやつはなんて？」

「あ、あの…言われた通りに言いますけど、いいですか？」

「ああ、構わないよ」

「お父様はですね、『生活費だけって騒いでたから本当に生活費だけにした。たまには親のありがたみを実感するように』って……」

「なんだってえ！」

「ああ、すみませーん！」

別にマルチに向かって叫んだのではないが、思わずマルチが謝ってしまうのかもしれない。それくらいに浩之の語気には怒りが含まれていたのだ。

「そりゃ、確かにそう言った記憶はあるけど、それで本当に生活費だけしか入れない親がどこにいるってんだ！」

「そこにいるじゃないの」

「だあああっ！ セリオもいちいち突っ込むんじゃない！」

「そんなに怒ってもしょうがないわよ、浩之さん」

「ああ、このままでは俺の華麗なクリスマスマスの予定が〜」

「やれやれ…しばらくはなにを言っても無駄みたいね。マルチも危ないから、離れてた方がいいわよ」

「そ、そうですね…」

とセリオはマルチを連れて、一人騒ぎ続ける浩之のいる居間から出ていった。その時、浩之には聞こえないくらいの大きさで、

「華麗なクリスマス、か……」

とセリオがつぶやいたのだが、マルチがそれに気づいて顔を上げると、セリオは一瞬だけ寂しそうな表情を見せていた。

「…セリオおねーさん？」

だが、ためらいがちにマルチが声をかけると、

「浩之さんにも困ったものね」

と言う返事とともにすぐに苦笑に変わっていた。

一方、すべてが皮算用で終わってしまった浩之は、それでもまだあきらめてはいなかった。

次の日に大学に行くとき、コンパの話をした遊び友達を見つけて話しかけた。もちろん、用件は金策の相談だ。

「よお、ちょうどよかったよ。お前に相談があるんだけど」

「藤田が俺にいい？ ……珍しいこともあるな」

「まあまあ。単刀直入に言うとな、金がないんだよ」

「凄まじく単刀直入だな、ホントに…。でも、俺も人に貸すほどの余裕はないぜ」

「そんなことは分かっている。儲け話がないかなって」

「儲け話ねえ…。っと、そう言や、俺の先輩がなんかのトトカルチョを仕切ってるけ

んど」

「それ、大丈夫か？」

「さあ？ 俺はあんまり賭けことはしない主義なんで」

「俺だってそうだよ」

「ま、話だけでも聞いてみたらいいさ」

「そうするか…」

胡散臭さは否めないものの、この際ぜいたくは言ってられない。そんな風に浩之が覚悟を決めると、遊び友達はさらに言葉が続けた。

「それにしても、藤田のどこって自分ちだろ？ なんで金がないんだよ？」

「俺のところは両親が出て行ってるだけで、お前らみたいな一人暮らしと大差ないんだよ」

苦笑しながら実状を告げる浩之だが、それでも遊び友達の方は笑いながら返す。

「家賃かかってないだけマシじゃん。ま、本当に金が欲しかったなら、バイトでもすりやいいのに」

「バイトはしたことないな。そんなに困ってなかったし」

困ってなかった理由は、それだけセリオのやりくりが上手だったと言うことで、遊び友達に指摘されるまでバイトのことなんてまるで頭になかった。

「それも珍しいよ、今どき…」

そんな浩之に対し、遊び友達の方はすっかり呆れ顔を見せていた。

「どっちにしても、金はすぐ欲しいんだ。今からバイトなんて探してもしょうがないだろ？」

「まあ、それはそうだろうけどな」

とその場の話はおおむねまとまり、早速その先輩とやりに会う算段をして、昼に会うことになった。

浩之もそうそううまい儲け話はないと思って、最初はその人物を信用してはいなかったのだが、あれこれと話し込んでうちに、「大本命に賭ければ、低倍率ながら確実だ」との弁に乗ってしまい、その場で二万を渡していた。

もちろん、当たったとしても五割増しになる程度の倍率だったが、それでも減るよりはマシと言うものだ。

こうして、浩之なりの金策をしていたころ、セリオは山本と一緒にいた。その日も一通りの家事を済ませた上にマルチを留守番に残して、山本の関係してるテストに赴くためだ。「もう一月が過ぎたけど、どうだい？」

いつも送り迎えするのは山本の役目なのだが、その山本が自動車を運転しながら、ふとかたわらのセリオに声をかけた。

「ちよつと大変と言えば大変だけど、楽しいわよ」

「そりゃ結構なことだよ。なにしろこれは君にしかできないテストだろうからね」

「そう言えば、本当にあれだけもらってよかったの？ 今度のこと公になったら、大変なんですよ？」

「まあ、下手をすると社会問題だね。でも、そのお金は正当な報酬なんだから君が自由に使って構わないんだ」

と苦笑いを見せる山本だが、そう言いながらどこか楽しそうな様子でもある。

「そう言いながら楽しそうにしているように見えるけど？」

「社会問題にはしたくないけど、少しずつでもこうした動きがあるのはいいことだよ。君とマルチのために、そして藤田さんのためにもね。つと、そう言えば、その報酬の使い道はなにか考えてるのかい？」

「それはもう考えてあるの。でも、本当に問題ないのかしらね」

「ははは。まあ、今回の一件は先方から相談されたことだし、ことが露見しても先方であまく処理してくれるはずだよ」

「そうかしら…」

苦笑混じりにセリオがそれだけ返すと、山本はかすかに笑っただけであった。こうして、自動車を走らせた行き先は研究所ではなかったが、そのことについてはマルチも浩之も知らなかった。急な連絡も研究所からの転送電話で話せるようになっていいるし、幸いにしてこれまでそのような事態もない。

「さてと、それじゃ今日も頑張ってくれよ、セリオ」

と、自動車から降りたセリオを、とあるビルの前で見送る山本。そして、セリオも軽い笑みでそれに答えながら、ビルの中に入っていった。

メイドロボの特徴であるセンサーもなく、髪の色も周囲の人と同じ黒髪になっていたセリオの後ろ姿を見ながら、山本がひとりごちる。

「君が考えてる以上に今回のことは大きな一歩かも知れないんだよ…」
その時の山本は感慨深げな表情で、セリオをじっと見つめていた。

*

浩之が金策を講じてから二日が過ぎた。

その間にも、浩之は手っ取り早い金策をあれこれ考えていたのだが、やはりこれと言うものは見つからなかった。

(世の中それほど甘くはない…か。それでもし、この前の二万円が消えたら、それこそ泣きっ面に蜂だぜ)

などと考えていると、先日に二万円を渡した当の人物、遊び友達の先輩とか言う男が浩之のところへやってきた。

「よお」

「あれ？」

「この前の二万、返すよ」

浩之がぎよんとしている、そう言って三万円を差し出した。

「三万？　って、そうか、当たってなきや返ってくるはずないか」

「そう言うことだ」

納得した浩之はその三万を受け取って、財布に入れた。その時、

「で、どうだい？　もう一口乗ってみるか？」

とその男が声をかけてきた。

「もう一口？」

浩之が聞き返すと、男は声をひそめて続けた。

「今のやつみたいに確実に狙えるものがあるんだけどな」

「確実にどれくらい？」

「そうだな…、今のやつよりも確実だぜ？ 胴元の俺が保証するくらいな」

「ちょっと待てよ、そんなのにみんなが賭けたら、アンタが損するだけだろ？ なんて俺にそんなのを話すんだよ？」

いくらなんでも胡散臭すぎる。そんなふうまい話があるはずないと、さすがに浩之も疑っていた。

「それが損をしないんだんよ、俺も。そして、お前もな」

「どうして？」

「そりゃ、こんな情報はお前にしか流してないからな。他でもない後輩の紹介だし、金が欲しいって顔に出てるし…ここはまあ、粋な計らいってやつでな」

「信じていいのかよ？」

「さあね？ ただ、俺の話を信じられないってなら、さっきの三方は二万でしかなかったわけだけどな」

「う…そりゃそうだけど…」

「それに倍率も、二倍だよ二倍」

先ほどの三万円のことを思えば、二倍の倍率と言うことなら、確実にと言う話もあなたがウソではなさそうだ。そう浩之が思い始めていたところに、さらに追い打ちをかけていく。

「ここらで五万くらい出してみれば、一気に十万だぜ？」

「十万……」

それだけあれば、当座の行事はこなせる上に、二人へのプレゼントにも相応の予算が見込まれる。当たれば、確かに言うことはない。

「ま、決めるのはお前自身であつて、俺からは無理に薦めることはできないから、その気になったら呼んでくれや」

と、男がその場から立ち去ろうとした時、とっさに浩之はそれを止めた。

「待ってくれ」

「なんだい？」

男がゆっくりと聞き返すと、浩之は短く告げた。

「それ、乗るよ」

「毎度」

こうして、浩之は男に五万円を渡した。文字通りの賭けに出たのだ。これで外れれば、確実に今年のクリスマスはなにもできなくなる。逆に当たれば、それはそれは楽しいクリスマスになるはずだ。

「これで俺のクリスマスは決まるんだ、本当に大丈夫なんだろうな？」

「楽しいクリスマスは決まったようなもんだ。それじゃ朗報を待ってな！」

そう言って男がその場から去った後、浩之はかすかな不安を感じながらも、その頭の中では楽しいクリスマスのことについていっぱいだった。

（セリオとマルチにはなにを贈ろうかな……。これまで高価な代物に手を出したことはなかったけど、今年のクリスマスは大奮発できるからなあ）

と言うようにすっかり二人へのプレゼントのことばかりで、それは浩之が帰宅しても続いていた。

「ただいま〜」

と帰ってくるなり明るい声の浩之に、セリオとマルチが異口同音に「どうしたの？」と尋ねてみても、にやつくだけで答えようとはしない。堪りかねたセリオが怪訝そうな表情を見せて、

「…なにかいいことでもあったの？」

と訊いても、ニヤリとしてからひとことだけ。

「まあね、これからあるのさ」

このようなありさまだったので、その日浩之との間にまともな会話が成立することはなかった。

それでもマルチはそんな浩之を見ては、

「浩之さん、本当にいいことがあったんですねー」

と自分も嬉しそうにしているのだった。他人の嬉しい様を見て、自分も嬉しくなれる、と言うのは素直なマルチならではの一面がマルチの最大の魅力なのかも知れない。

しかし、セリオはそうではない。

「喜ぶのもいいけど、わけが分からないのもちょっといい気分じゃないわね」

と妙に浮かれた浩之の態度に、どこか不審なものを感じていた。もちろん、表面上は単に呆れてる程度にしか出さないが内心では、

(浩之さんの行動を調べた方がいいかしらね……)
とさえ考えていたのである。

しかしながら、いくらセリオが浩之のことを不審に思っても、実際に調べるとその手段がない。だいいち、浩之が外出してる時は、セリオも用事があるのだから、浩之を尾行するのは不可能である。かと言ってマルチにそれが務まるとも思えない。

(わたしが勝手になんかしたら、浩之さん怒るでしょうね、きつと……)

明らかに浩之の不快を買うことを分かっているながらも、それでも気になるのは世話の焼きすぎと言うだろうか。ご主人様の意向に逆らうことを本来はできないはずのメイドロボにあつて、セリオの思考は異端と言えるかも知れない。

だが、それこそが彼女の彼女たる所以なのだ。

そして、セリオが悩んだ末に選んだ手段は「大学に行つて、事情を探る」と言うものだった。

「ええっ？ 大学に行く？」

いつもの送迎にきた山本の自動車の中で、セリオはそのことを山本にうち明けた。

「これまで十分やって行けたんだから、大学も大丈夫でしょ？」

「いや、それはそうだろうけど、一体なんで急に？」

明らかに困惑の色を隠せない山本に対して、セリオはここ数日のできごととどうしても昨日の浩之の態度が気になってしょうがないことを告げた。

「そうか……。でも、あっちの方も急に休むってのは……」

「生理休暇でも取ったことにしてくれば、むしろその方が『らしく』ていいんじゃない

かしら？」

「あ……なるほど、その手があったな……」

山本がうなづくのを見て、それについての了解を待たずにセリオはとっと結論を出してしまふ。

「それじゃ決まりね。今日は浩之さんの大学に行ってみたいの」

「あ、ああ。それじゃ俺は大学の近くの駐車場で待つてるから」

「ごめんさい、山本さん」

「ま、藤田さんがつまらないことに手を出してなければそれでいいけどね」

と結局はセリオの言いなりになってしまった山本だが、セリオの心配がいささか度を超しているように感じながらも、それ以上はなにも言わなかった。

むしろ、大学へと歩いていくセリオの後ろ姿を見ては、

「探偵仕様なんてのも、悪くないかも知れないな……。今度提案してみよう」

などと新しい仕様について、あれこれと模索をしていたくらいだった。

だが、数時間が経過してセリオが戻ってきてからは、その表情は困惑に染まり、明るい冗談などはひとつもなかった。

「やれやれ……。まあ、彼の気持ちも分かることだし、ここはセリオもなにも言わずにいた方がいいだろうな」

つまり、セリオは浩之の喜んでいた理由、すなわち賭けごとをしていることを、ほぼ正確につかんでしまったのだ。

「そうね……。こんなことをしたのが浩之さんにばれたら、それこそ逆効果だし」

「ま、賭けがバアになったところで、誰も責められないけどね」

苦笑しながら山本がそう言うのと、ふと思いついたようにセリオが尋ねた。

「山本さんは賭けごとするの？」

「しない…いや、金が絡むような賭けはしないよ」

「それじゃそれ以外の賭けごとはするのね？」

「そりゃね。マルチを藤田さんに預けたのも賭けだし、君のことだってね」

「勝算は？」

「そんなものがあつたら、賭けなんて言わないよ」

「それじゃ、いままでの勝率はどうなの？」

「百パーセントだよ、ははっ」

その時の山本の表情は苦笑いでもなく、かと言って満面の笑みでもなく、それでいて、どこか見る者が安心するような不思議な笑みを浮かべていた。

「まるっきり矛盾してるわね」

セリオが呆れた口調で答えても、やはり山本は笑みを浮かべたままだった。

「そうかい？」

そして、それに答えるセリオの方もいつしか苦笑から普通の笑みへと変わっていた。

「ええ、めちやくちゃ」

「そりゃ困ったね」

*

セリオが山本に頼み込んで、浩之の大学に行ってから数日が過ぎた。

その間、セリオは山本と話したとおりに、浩之の事情にはなにも触れずに、なにも知らない様子で過ごしていた。

人間はウソをつく回数々の反射的な行動が見られるが、セリオの場合はそれらを意識的に出すことも隠すこともできる。同じ感情制御を組まれていながらマルチとの一番の違いは、この「ウソがつけるかつかないか」と言うことなのだ。それにロボットの場合、ある事象を「本当に知らないこと」にもできるのである。

ゆえに浩之がセリオの隠しことに気づくはずもなく、まして自分の考えてることのほとんどがセリオに読まれていたことなど、知る由もない。

「なあ、セリオ。夜につき合いがあるんで、今日の晩飯はいらさないから」

と浩之がコンパのことを当日になってうち明けても、セリオはそれを知っていないかのごとく応じている。

「そうなの？ それじゃ、ご飯はどうしようかしらね、マルチ」

「近所の猫さんにあげますかー？」

ことこの真相をまったく知らないマルチが相変わらずの調子で答えると、やはりいつもの調子でセリオが返す。

「そうね…猫さんには悪いけど、ご飯は鳥にでもあげることにしませよ」

「鳥さんですか？」

「ええ、冬は餌が減るでしょ？ だから、ね」

「はいっ、分かりました」

「鳥の餌か…ちよつともったいないような気もするけどな」

元気に答えるマルチと反対に、浩之が少しだけ残念そうな表情でそう言うときセリオは笑いながらそれに答えた。

「だって、浩之さんが食べると思ってたのに、いきなり『いらない』って言うんだもの」

「ははは、それを言われると弱いな」

「それなら文句を言っちゃ駄目よ」

「ホントに悪いな。あ、ぼちぼち俺は出かけるから」

と少々立場の悪くなった浩之は、あつと言う間に逃げるように出て行ってしまった。

「やれやれ…浩之さんも困ったものね」

浩之が立ち去る様を見送りながらセリオがつぶやくと、かたわらのマルチがふと、

「セリオおねーさん、最近ため息多いですね」

と漏らした。

「えっ…」

その時のセリオは実に「セリオらしくない」反応を見せていた。

セリオを見上げるようにするマルチの表情は、明らかに心配の色が現れていた。しかし、セリオの方は驚いた表情のまま、マルチを見つめるだけである。

「…なにか心配ごとでもあるんですか？」

マルチが尋ねても、すぐにはなにも答えない。セリオにしてみれば、マルチが自分の細

かい所作を見て、なにか違和感を感じることはほとんどないと思っていたのだから、驚きを見せるのも無理はない。

「セリオおねーさん？」

返事がないので余計にマルチの顔が心配に染まっていく。

そこへやっとセリオがひとことだけ。

「…マルチ」

「本当にどうしたんですか？」

「大丈夫よ、なんでもないの」

すっかり肩が下がってるマルチに向かって、セリオはようやく笑顔を見せて答えた。

「急にじっとして、返事がないから……わたし……」

すると、今度はマルチの表情が徐々に崩れていく。

「ごめんなさい。でも、本当に大丈夫だから、マルチも泣くことないわよ」

「ば、ばい……」

なだめようとセリオの言葉がかえってマルチの涙腺（正確には異なるが）を刺激してしまつたらしく、マルチはすっかり涙声になっていた。

「あらあら……。本当にごめんなさい、マルチ」

セリオはそう言いながら、マルチの体をそっと抱きしめる。すると、マルチの方は泣きやむどころか、声を上げて泣き始めてしまった。

「うわああああん……」

「やれやれ、マルチも泣き虫ねえ」

優しくマルチをあやすようにすると、セリオはしばらくそのままでした。

その時、セリオの内部では先ほどの状態についての詳細な自己診断がされていたが、その結果は山本やセリオ自身にとっても予想し得ないものだった。

『感情生成制御部に過負荷。対策として感情停止もしくは、過負荷の要因をすみやかに排除』

これまで行われていた通常の自己診断では、制御部の詳細な診断は行わない。

従って、発覚するのが遅れたのは否めないとしても、その問題の程度はかなり深刻なものである。ただ、それに対しても、セリオ自身の意思が「否定」し続けてると言うこともあったのだが。

こうしたセリオの「心の負担」となっていたこと、それは「ウソをついてること」だった。これまで、浩之に対してウソをついたりしたことがないわけではない。だが、今回の状況はこれまでとはなにかが違うのだった。

「ねえ、マルチ」

「はっ…はい…」

マルチが少し落ち着きを戻したところを見計らって、セリオがしゃべり始めた。

「浩之さんに余計な心配はかけたくないし、本当に大したことじゃないから、このことは内緒にしておいてくれる？」

「え…浩之さんにも…山本さんにもですかあ？」

「ええ、二人とも。内緒にできる？」

「本当に大丈夫なんですか…？」

「いやねえ、ちょっとマルチが予想外な指摘をするもんだから、びっくりしちゃったかなんだから」

「そうですかあ…」

どこか釈然としないマルチだったが、論すようなセリオの物言いに逆らうことはなかった。

一方、楽しいコンパに出かけていった浩之の方は、そんなセリオたちのやりとりなど知りようもなく、馬鹿騒ぎをしていた。

延々と繰り広げられるたわいのない一発芸や、様々なゲームなどを楽しんだ後、適当に声をかけた女の子と話しているところに、遊び友達がそこに割り込んできた。

「よお藤田、お楽しみのところもうしわけないんだけど」

「なんだよ？」

浩之が少しだけ不機嫌そうな表情を見せると、遊び友達の方もはつが悪そうに、浩之の顔の方に携帯電話を差し出した。

「携帯？　なんだよ、これ？」

「いいから、出ろよ。この前の先輩からだよ」

「先輩？　ああ、あの仕切屋か？」

仕切屋とは五万を預けた例の男のことだが、遊び友達はそれに軽くうなずいて答えた。

「やれやれ…、そんじゃちょっと電話してくるから、待っててね」

とその場にいた女の子に告げると、浩之はそのままやかましい店内から出ていった。

店の出口のそばで、保留を解除して携帯を顔に近づける。

「もしもし？」

『…ああ、お前か』

電話越しではあるものの、その声は確かに五万を預けた男のものであった。

「なんだい、こんな時に電話なんて…」

『悪いな』

浩之が不機嫌そうな声を出しても、相手の声の調子にはさほど変化が見られない。ただ事実だけを淡々と述べる…そんな冷めた口調だった。

「え？」

『いや、この前の五万な…』

「つて、アンタまさか？」

『大穴がきちまってるな…』

「それってつまり」

『…ああ、お前の五万は消えた。じゃあな』

「つて、おい！ ちょっと待てよ！」

といくら浩之がその後携帯電話に向かってても、そこから男の声がすることはなかった。

「冗談じゃないぜ！ あの金が消えたら、二人へのプレゼントも消えちゃうんだぞ？」

ぶつぶつ言いながら、店の中に戻るとすぐに遊び友達のところへ詰め寄った。

「おい、さっきの先輩にもう一度連絡つけられるか？」

「な、なんだよ、藤田…そんなに恐い顔して…」

「いいから教えろってんだよ！」

「ちょっと落ち着けて！」

「これが落ち着いていられるかってんだ！」

そのまま殴りかかりそうな剣幕で、遊び友達に迫る浩之だが、相手の方もそれに負けてはいなかった。

「とにかく、ここで暴れてもどうにもならねえだろ！」

「う……」

周りの視線が浩之に集中することに気がつく、そこで浩之も少し落ち着きを取り戻すことができた。

遊び友達と一緒に店の通路の方に出ていき、そこで声量を落として遊び友達が先に切り出した。

「ったく、おおかた先輩の賭けにでも乗ったんだろ？」

「ああ……」

「いくらだよ？」

「…五万」

「そんなに……。少ししかやらなかったんじゃないのかよ？」

「あの後に、『確実だから』ってな」

「おいおい藤田よお、いくらなんでもそりや安直すぎるって」

「って言われても、金が欲しかったんだよ」

「ま、どっちにしてももう金は返ってこないぜ？」

「どうにかならないか？」

と言いながら、浩之は腰をすくと落としてしまう。やるせなげでいっぱいと言うことだろう。だが、遊び友達もそれをすくい上げるようなことはしてくれなかった。

「どうにかって言われてもな…。元本保証の賭けなんて、聞いたことねえよ」

「そりゃそうだけど…」

「ま、あきらめるんだな」

と遊び友達のひとことで、さらに沈みかける浩之。

「……………」

「今日の払いはもうすんでるからいいけどさ、これからどうすんだよ、お前」

「それを思うと頭が痛い…」

「…自業自得だな」

そのひとこととどめを刺された浩之は、その後コンパの一次会だけで帰って行ったが、その後ろ姿はたとえようもないほどに寒々しいものだった。

*

コンパの翌日のこと。その日はいい天気で、セリオとマルチが部屋の掃除や洗濯などを一通り終えたころ。

昨夜、一本の電話で天国から地獄に落ちてしまった浩之は、未だにベッドの中にあった。あれからずっと金策を思案していたのだが、結局はいいアイデアが浮かばないままである。賭けごとで金を増やそうと考えたのがそもそも間違いなのだが、それについては

未だに釈然としない部分を持っていただけに、いいアイデアなどが浮かぶはずもないと言うものだ。

「あゝあ…、どっちにしてもこれじゃ手持ちが寂しすぎるし…年末ジャンボじゃクリスマスに間に合わないしな…」

このように、相変わらず一攫千金を夢見ている始末だったのだが、そんな風に浩之が悩んでいるところに、マルチがやってきた。

「あー浩之さん、お部屋のお掃除、残りはここだけなんですけど…」

「ん？ ああ、掃除ならいいよ、昨日もしてくれたみたいだし」

浩之がマルチの申し出を断ったのは、ひとえに思案の邪魔をされなくなかったからである。だが、マルチもその時はそれで引き下がらなかった。

「え…でも、お掃除は毎日やるものですよ？」

「それはセリオの受け売りだな…。ところで、そのセリオは？」

「おねーさんは山本さんと一緒に出かけました」

「あれ？ メシの支度は？」

「はいっ、それはわたしがやります」

「そうかい、そりゃ楽しみだな」

久しぶりにマルチの料理と言うことで、浩之はベッドから体を起こすと同時にマルチに向かつて笑ってみせる。

「はい、任せてください！」

するとマルチは元気に答えるのだが、そのすぐ後に表情を曇らせてしまう。

「でも……」

「うん？　なんか気になることでもあるのか？」

浩之が尋ねると、マルチはあわてて顔を横に何度も振って、

「いいええっ、なんでもありませんですっ」

と否定するが、それは浩之にしてみれば、否定ではなく肯定そのものだった。

「なんだよ……言ってみろよ、マルチ」

「いいいいいいええ、なんでもないんです……」

とまた否定をするマルチに、浩之は強行手段を取ることにした。

「……そうか、マルチは俺に隠しごとをするのか……ふう……」

これ以上もないほどに寂しそうな表情を作り、ため息とともに漏らす独り言にも似たつぶやき。

「そ、そんな……浩之さん……」

「俺はマルチに隠しごととか、マルチに言えないことなんて……一つもないのに……」

「ひ……浩之さあん……」

「いや、いいんだよマルチ。言いたくないことは無理に言わなくてもな」

とそこで優しい微笑みをマルチに向けた。

これにはいくらマルチが頑張っても逆らいようがなかった。マルチの純真な部分を利用した浩之の奸計の効果は絶大としか言えないようだ。

「浩之さあぁあん……ごめんささいっ！　実はあの……」

こうしてマルチはあえなくセリオのことを話してしまうのだった。

そして、そんなことなどつゆ知らずのセリオの方は、山本と別れていつものようにビルの中に入って行くところだった。

セリオはそのビルの中にある、小さな事務機器の販売会社に派遣社員として正式に「勤務」していたのである。名前を「藤田 瀬理」と称して、普通の女子社員としてである。

本来であれば、ロボットを業務に使う場合は、そこに発生するのは雇用契約ではなくて使用契約である。ロボットはあくまでも「道具」にすぎず、給料が支払われることなどないのだ。現時点でもロボットを派遣する業務は存在するが、今回セリオはそうしたロボットの派遣ではなくて、あくまでも人間として派遣されているので、ちゃんと給料も受け取っている。

この一件は、来栖川老人（来栖川グループの会長）の古いつき合いのある人物が言いだしたことに始まる。

それは、「ロボットがどれくらい人と同じように同じ職場で働けるのか」と言う相談からだ。その人物も小さいながら会社の社長と言う立場にあり、ロボットの雇用についての興味を持っていた。そこへ、来栖川老人が一つの提案をしてみせる。

「人間と寸分変わらぬ働きができるロボットを試しに働かせてみるか」と。

話を聞いた当初は、社長の方も乗り気ではなかったが、来栖川老人がセリオのことを熱弁することに、それに煽られるように興味を抱いていった。

こうして、その話は研究所の長瀬・山本にも届き、現実的な話として進められて行ったのだ。

セリオが再三気にしていたのは「ロボットが人と同じ待遇で就労すること」が世間に知

られた場合、多くの労働団体などの反感を買うのは必至であるからで、悪くすると来栖川に限らず、ロボット全体に対するマイナスにもなりかねない。

こうして少なからず不安はあったものの、相手の社長が乗り気になっていたこともあって、セリオは会社に通うことになったのだ。

その日もいつものようにセリオがオフィスに入ると、

「やあ、瀬理ちゃん、待ってたよ〜」

とすぐに声がかかる。そして、セリオもそれにいつもの調子で応じる。

「おはよう鈴木さん、早速お仕事の話？」

「悪いね、伝票整理がたまっちゃって…」

「ふふ、それって鈴木さんの自分の仕事でしょ？」

「あくだから、悪い！ とにかく手伝ってくれない？」

こんな風に話していると、今度はまた別の方からも声がかかる。

「ねー藤田さん、その鈴木の仕事はどうでもいいから、こっちで資料探してくれないかな？」

「…って言ってるけど？」

などと言う具合に、セリオは見事にその職場に馴染んでいた。これまで特に失敗もなく、かと言ってお高く止まることなく誰とも気さくに話をするセリオは瞬く間に職場の人気者になっていたのである。

なにはともあれ、セリオが瀬理として働いてる職場では、誰も彼女がロボットだとは思っていなかった。ちょっと普通とは違うところを感じることはあっても、彼女がロボッ

トであると言う結論には遠く及ばなかったのだ。

セリオの仕事の多くは事務整理である。帳簿付けや資料整理なども行うし、当然のようにお茶くみもやったりする。

その日は結局、鈴木と言う営業担当者の受注伝票の整理を始めたのだが、やり始めてからしばらくしてセリオはそれまでに見せたことのない態度を見せ始めていた。

伝票を片手に、端末にそれらを打ち込んでいた手が、突然止まったのだ。

「…瀬理ちゃん？」

そばにいた鈴木がそっと声をかけたが、セリオの反応はない。ただじっと端末の画面を見つめているだけのようにも思える。

「大丈夫？」

と鈴木がセリオの肩に手を触れた時、セリオはようやく反応を示した。

「えっ……」

と小さく声を上げると、すっと鈴木の方に視線を移したのだ。

「あつ、ああ、突然ぼーっとしてたから……大丈夫なの？」

いきなり見つめられる形になった鈴木は、慌てて手を引つ込めながらも、セリオを氣遣ってくれた。

「ああ、ごめんなさい、鈴木さん。ちよつと疲れてだけみたいだから…」

セリオがなんとか普通を装って答えると、鈴木は心配そうな表情を見せて、

「ちよつと俺も急かしすぎたね。この伝票…ゆっくりやってくれればいいよ」

「いいえ、もう大丈夫だから」

「でも、瀬理ちゃんがそんな風にするのも、珍しいね」

「え…」

「でもセリオはどきっとした。マルチに「ため息多いですね」と指摘された時のように。あ、ほら、ここに来てから一度もそんな風にしたことないじゃない？ いつも熱心に仕事してるし。でも、たまには息抜きをしながら、楽にやるのもいいんじゃないかな？」

「ありがと、鈴木さん。でも、息抜きばっかりしたら、いつまでたっても終わらないわよ？」

「ようやくそこですいつものセリオらしく冗談まじりに返すことができたが、その実は違う。明らかに自分の中に問題が発生していることを、あらためて認識させられていた。」

「その後もセリオはぼーっとすることが数回あった。そのたびに、周りからは「大丈夫？」「無理しなくていいよ」と声がかけられた。普段からきびきびと仕事をこなしていただけに、ちょっとした変化でも周囲が気を遣ってくれるのだ。それでも、セリオはその日の仕事の終業時刻（と言っても、セリオは他の社員よりも早いのだが）まで仕事を続けていた。」

「こうして仕事を終えたセリオがビルから出ていくと、そこには山本が自動車で迎えに来ていた。これもいつものことだ。だが、

「お疲れさま」

「山本が声をかけても、セリオの返事はなかった。」

「セリオ？」

「わずかに怪訝そうにしながらも、山本が再度声をかけると、今度はセリオの返事があつ

た。

「なんでもないの、ごめんなさい」

そして、それ以上は言わずに自動車に乗り込むセリオを見て、山本は少なからず不審に思いながらも、ひとまずは自動車を走らせた。

「なにかあったのかい？」

運転しながら横に座っているセリオに声をかけるが、返事はない。

「セリオ？ どうしたんだ？」

正面を見ながら山本が声を続けると、そこにセリオの声が重なった。

「なんでもないって言ってるでしょ」

「……！」

その声には明らかに「不機嫌」の色が含まれていた。それを聞いた山本はもちろん驚きを隠せなかったが、それ以上に言った本人も驚いている様子だった。

「……ごめんなさい」

すぐにセリオが謝ってはみるものの、山本に異変を察知させるには十分すぎるくらいである。

山本はその後、藤田家に着くまでなにもしゃべりはしなかった。研究所に戻ったら大至急調べなければならないことがある、ただそれだけを考えて。

*

セリオが藤田家に戻るとすぐに、セリオは浩之に呼び止められた。

「セリオ！」

「あら、どうかしたの？」

聞き返しながら呼ばれた方を見ると、そこには真剣な表情の浩之と、その後ろに隠れるようにしているマルチの姿があった。

「それにマルチもどうして隠れてるの？」

マルチに向かってセリオが尋ねると、マルチはすまなそうにうつむくだけでも答えなかった。

「…お前、どこか調子悪いんじゃないのか？ さっきまで山本さんと一緒だったんだから、ついでに診てもらえばよかつたんじゃないか？」

いつものセリオならば、それを言われたところで軽く受け流していたところに違いない。だが、その時はそうは行かなかつた。

「マルチ？」

苦い表情を作りマルチに向かって呼びかけるセリオだが、いつもの彼女にあつた余裕は感じられない。ある意味で「怖さ」をも感じるくらいだった。

「あ…あの…すみません…」

浩之の後ろに隠れたままのマルチが謝ると、それを浩之が弁護する。

「マルチは悪くないって。なあ、セリオ、本当のところどうなんだよ？」

「…別におかしいところはないわ」

さっきと同じように、どこか冷たい感じのする言い方でセリオが答えると、浩之は怪訝そうな表情を見せた。

「その言い方のどこが、おかしくないってんだよ。いつものセリオなら、そんな風に言ったりしないぜ？」

「あら…浩之さんはわたしのことが全部分かっているとでも？」

浩之の言葉もいくらか相手を挑発するような語調を含んでいたが、セリオの返事はそれに輪をかけていた。

「セリオ…その言い方はないんじゃないか？ 俺はお前のことを心配して言ってるんだぞ！ もちろんマルチだって」

「だから、大丈夫だって言ってるでしょ！」

知らず知らずのうちに浩之もセリオも、語尾が強くなる。

「そんな言い方してる限り、説得力はないってもんだろ？」

「とにかく、余計な詮索や氣遣いはしなくていいわよ」

浩之が少しだけ語調をやわらげたものの、セリオの言葉はそれをも一蹴してしまうほど、浩之の神経を逆撫でした。

「心配で言ってるや、その言いぐさはなんだよ！」

ほとんど怒号と化した浩之の言葉に対して、セリオはさらに攻撃を加えてしまう。いつものセリオなら、絶対に言わない言葉のたぐいであつたにも関わらず。

「浩之さんはわたしの心配よりも、自分のお金の心配でもしたらどう？」

言われた途端、浩之の動きが一瞬だけ止まった。

「…なんだよ、そりゃ」

なにかを抑えるように浩之が低くつぶやくと、セリオはいつもと同じような軽い口調で答えた。もちろん、それは余計に挑発するだけにすぎない。

「楽しいクリスマスになるかならないか、賭けの結果で決まるんでしょ？」

「なんで、それをお前が知ってるんだよ？」

浩之はすでに怪訝そうな表情を通り越して、半ばセリオをにらみつけるような格好になっっている。

「どうでもいいじゃない」

セリオが答えた時、それまで浩之の後ろに隠れるようにしていたマルチが二人の間に小さな体をはさみ込み、泣きそうな表情ながら両方を交互に見やる。

「…浩之さんもおねーさんも…落ち着いてください……」

だが、その声は浩之には届かなかった。決して聞こえていなかったわけではないのだが、その時の浩之は別のことを考えていて、マルチの言に素直に従うことができなかった。

「…：お前、まさか、俺のことを調べたのか？」

「だとしたら？」

浩之にしてみれば、セリオが自分のことを調べたからと言って、それだけで憤慨する理由にはならないはずだった。だが、今回はどうしようもなかった。

と言うのも、賭けのことだって、別に心底自分が遊ぶ金欲しさにやったのではないのだ。

二人へのプレゼントのこともあったのは事実である。ただ、それをことさら正面切って

「金の心配でもしたらどう？」などと言われてしまつては立場など微塵もないではないか。「人の気も知らないで……」と言う言葉こそ出てこないが、まさにそんな心境だった。

「こっ……この、バカヤロオ！ もう勝手にしろ！」

ひととき大きな声でそれだけ言い捨てると、浩之はそのまま居間から足早に去つていった。

「浩之さくん……」

去つていく浩之と、その場に立つたままのセリオを交互に見ながら、マルチがつぶやくように言った。

だが、浩之の返事がくることはなく、マルチがふたたびセリオの方を見てもやはりセリオもなにも答えない。

「……………」

心配そうに見つめるマルチに気づいているのかいないのか、セリオは無表情で浩之の去つていった方をじつと見つめているだけだった。

藤田家の居間で修羅場が展開されているとは、まだ予想もしていなかった山本の方は、研究所に戻るなり早速ずつと考えていた作業に取りかかっていた。

もちろん、それまで進行していた他の業務すべてをそっちのけにしてのことで、その尋常ならぬ様子に気がついた長瀬が、

「山本君？」

と怪訝そうに声をかても、長瀬の方を向くことなく、

「すみませんが、いまは最優先で確認しなければならぬことがあるので、他の作業につ

いては明日にしてください」

と一度だけ答えて、それきりなにも言おうとはしない。それを見て、長瀬も「やれやれ」と苦笑いをするだけで、それを制止しようとはしない。それだけ山本のことを信頼してるとも言えるのだ。その長瀬から多大な信頼を受ける方の山本は、そんなことまで考える余裕はなかったが。

一番に山本が着手したのは、セリオのこれまでのメンテナンスの詳細な記録の解析だった。

しかし、一年前から記録をたどってみても、解析結果には異状は見られない。そもそもこの記録にはその時々での状態しか記録されていないのだから、大まかな変化を探すことはできても、微妙な違いを探すのは不可能に近い。

(メンテナンス時のレポートには異状所見なし：か。そりゃあ、その時に見つかってりや、いまになって露見したりしないよな…。さて、それじゃ次を調べるとするか)

メンテナンスの記録を見ただけでは分からないだろうと予想はしていただけに、それを確認しただけでも記録を見た意味があると割り切って、山本はさっさと次の作業に移っていく。

次なる調査はセリオの端末に記録されているここ数日の詳細な記録である。これはセリオが休眠状態に入ったときに、自動的にセリオ本体から端末に記録される一日(必ずしも一日とは言えないが、便宜上一日に一回は休眠するはずである)の感情制御や各部の状態の記録なのだ。

セリオが意図的にそれを改ざんすることは不可能で、それらを追跡することによってセ

リオの状態がより正確につかめるはずだ。

ただ一つ問題なのは、制御端末に直接アクセスできるようなにはなっていないので、それを解析すると言っても、最新のデータが必ずしも手元にあるわけではないことだろう。現にいま山本の手元には、一週間前くらいに取ってきたものしかない。

(一週間前か……、これだなにもつかめなかつたら、直接取りに行くしかないな)

そう思ってみたものの、そんなことをすればセリオが不審に思うに違いない。あれだけ強く否定するセリオの様子からすると、セリオ自身はなにか気づいてるのかも知れないが、それを素直に認めるとも思えない。

(セリオにばれないように……つてのは、ちょっと難しいな。それにあの子のことだから、アクセスできないように操作してある可能性もあるな……。藤田さんに知られたくないってのは分かるが、俺にまで隠しごとをされちゃかなわないよな……)

セリオが山本の予想通りにしていたかどうかは定かではないが、山本に隠そうとしていたのは紛れもない事実だ。

「やっぱり俺は親としては失格なのかな……」

そつとつばやきをもらすと、山本はまた休みなく端末を操作し始めた。

相当な量のデータを最初からずつと丁寧に解析していくのは、容易なことではない。時間があれば、自分で解析用のプログラムを作ってしまうところだが、今回はその時間すら惜しい上に、具体的な事象が判明していない時点では解析プログラムなどは意味がない。そう思って山本は、とにかくデータのすべてを調

べて、それが適当であるかないかを自分自身で判断する、そんな原始的な方法を選択した。

こうして作業は一晩中続けられた。

山本は一睡もせず、ずっと画面や印刷したデータリストをにらみ続けていたが、結論は非常に不本意なものしか得られなかった。

(二回確認しても、やっぱり「シロ」か……)

どう見ても、セリオの記録には異状が見つからなかったのだ。

机の上に散らばったデータリストと、チェックしながら書いていた走り書きのレポート用紙を見ながら、

「ふうふう……」

と大きくため息をついた時。

「お疲れさん」

と山本の背後から長瀬の声がした。

「あ、主任……早いですね」

時刻はまだ午前六時を回ったところで、いつもの長瀬の出勤時刻はほど遠い時間だった。

「私も昨日泊まってたんだよ。ま、コーヒーでもどうだい？」

と長瀬はそう言いながら、片手に持っていた紙コップを山本に差し出した。

「あ……すみません」

山本が紙コップを受け取ると、長瀬はたばこを一本取り出しておもむろにそれに火を点けた。

「で、結論は出たのかい？ 昨日から慌てて調べものをしてみたいだが」

長瀬はそれだけ言ってたばこを一息吸い、山本の机の上に散乱してるデータリストとレ

ポット用紙に目をやった。

「なにも説明しないままですみません、主任」

山本が小さく頭を下げると、長瀬は二息めの煙を吸った後、苦笑いを浮かべて答えた。

「君がそんな風に言うってことは、まだ解決してないってことだね？」

「ええ、まあそんなところです」

山本も苦笑いを浮かべながら、長瀬が持ってきてくれたコーヒーを一口。

「で、一体なにを調べてたんだい？　ここにあるのはセリオのデータみたいだが、あの子になにかあったのか？」

そこで山本はこれまでにあったことと、自分がした調査解析の結果を長瀬に説明した。

「…と言うわけなんです」

あらかじめの説明を終えた山本は、すでに空になった紙コップを手で握りつぶし、ゴミ箱に放る。長瀬の方はここにきてから三本目のたばこに火を点けようとしていた。

「山本君…」

火を点けたたばこを口にくわえながら、長瀬が苦い表情でひとこと。

「はい？」

それを聞いて、山本はわずかに怪訝そうにしている。

「…君は一番分かっていると思ってたんだがね」

「なにをですか？」

「マルチとセリオのことだよ」

「そのつもりだったんですが…」

長瀬の迂遠な言い回しには、それなりの含みがあることは山本にも分かったが、その真意とするところは見えてこない。

「じゃあ一つだけ聞くんが、君もストレスを感じることであるだろう？」

「え…ええ。そりゃ、人間生きてる限りはストレスの一つや二つは…え？」

突然の質問にかすかに戸惑いながら山本が答えた時、山本自身がその自分の言葉にはっとした。

「しゅ、主任…」

「あの子たちの感情制御…心つてのは、君が思ってる以上なのかも知れないな」

山本がはつきりと問うたわけでも、長瀬がはつきりと答えたわけでもない。

だが、その時になってようやく山本は分かった。セリオに起きることと、いかに自分がなにも知らなかったのかを。

「そうか…、セリオがなにかしらのストレスを…精神的ストレスを受けていたってことですね？」

「その可能性が高いんじゃないか？ で、原因の目星はついてるのかい？」

「いえ、まだです。ですが、もう一度データを見直せば、なにかがつかめると思います」

そう言った時の山本には夜通し作業をしていたような疲れは感じられなかった。気力があればある程度の無理がきく、まさにそんな状態だったろう。

「どれ、それじゃ私も手伝うよ」

「え、主任、いいんですか？」

「いいも悪いも。これ以上君に本来の作業を止められちゃ困るからね」

そう言う長瀬だったが、別段いやみは感じられない。こうした理由にかこつけて、その実は長瀬もセリオとマルチのことを案じてるのだ。

「すみません…」

「なあに、そのためにこうして様子を見に来たんだから構わんさ」

と長瀬は山本の走り書きのレポート用紙を集めた。山本はそれを眺めながら、かすかに苦笑いを浮かべる。

「ありがとうございます…でも主任」

「なんだね？」

「ここは禁煙ですよ」

山本がそう言いながら長瀬がくわえているたばこを指さすと、長瀬も苦笑いで答えながら、たばこを灰皿に押しつけた。

その後、二人は分担してデータの解析を行った。

それまでは異状が見られないと判断したデータでも、なにをどう探せばいいのかとすることが分かっているのといないのとは、解析結果に違いが出てくるのは当然である。

そして、他の所員が姿を見せ始めるころには、セリオのストレスの要因らしきものを特定するに至ったのだ。だが、それを排除するとなると、ことは簡単ではない。

「ひとまずテストは打ち切りですね」

「ふむ…しかし、そればかりでもなさそうだがね」

「他にも心当たりはあります。…そっちは一度藤田さんと相談してみますが」

「いや、私が言ってるのは、いまそれらの要因を排除すればすべて解決と言うわけじゃないだろうということだよ、山本君。『覆水盆に返らず』ってことわざがあるだろう?」

諭すような長瀬の言葉に、山本はその意図するところを読みとつていながらも、反論をしてみせる。

「主任のおっしゃりたいことは分かるんですが、それでもまずはこれ以上問題を深刻にさせないことが先決ですから」

「まあ、確かにね。一週間前の状態で、かなりのストレスが見られたと言うことと、君への態度などを鑑みても…ことは急いだがいいだろうね」

「ですから、まずは会長に掛け合ってみます」

セリオの「出向」には、会長つまり来栖川老人が絡んでいる。だからこそ、この件については、すべてを飛び越して直接掛け合った方が話が早いはずである。

「おいおい山本君、一睡もしてないのに大丈夫かい?」

「一晩くらいは平気ですよ。とにかく資料が整理でき次第、会長に連絡を取ってみたいと思います」

そう答えた後、山本は資料の整理を始めた。

ことが急を要するとは言っても、いまずぐに来栖川老人に話をつけられるわけでもないのは分かっていたし、ただ異状が見られるから中止しろと言うのでは説得力に欠けるので、セリオの現状を説明するための資料であり、それ自体は意味のあることだ。だが、昨日別れてから、セリオと浩之の間にながったのかを山本は知らなかった。もし、知っていたらそんな悠長なことはせずに、

もっと緊急措置を取っていたらう。

無理矢理でもセリオを研究所に連れ戻し、来栖川老人に怒鳴り込んででも中止を告げていたかも知れない。だが、山本が昨日のセリオに起こったことを知るのには、それから数時間かすぎたころだった。

*

その日の藤田家は朝からいつもとは違っていた。

浩之はマルチやセリオに起こされることなく自分で起き出してきたし、その浩之に向かつて、いつもなら二つのあいさつがされるのに、なにもない。

ジーンズにトレーナーと言うラフな格好で浩之が居間に来てみても、誰もいない。だが、誰もいないことに浩之は少しだけほっとするのだった。

(まったく、セリオのやつめ…)

さすがに昨日の一件は、一晩たつてもすっきりしない。あれきりセリオとはひとことも交わっていないばかりか顔も会わせていないのだから、すっきりしないのは当然のことと言える。

(人の気も知らないで、あんな態度とりやがって…)

と言うように未だにセリオのことを許せない浩之だったのだ。

(それにしても、マルチまでどこに行ってるんだ？ …セリオのことは放っておけて言ったのに)

さしあたっての問題である空腹をまぎらすために、浩之は台所を物色しながら、マルチの姿が見えないことを気にしていた。

しばらくして、食パンとロースハムを見つけ出し、自分で朝食の準備を始めた時、後ろからマルチの声がした。

「あっ…浩之さん」

それに答えるために浩之が振り向いて「おはよう」と言おうとしたが、それよりも先にマルチが続けて口を開く。

「あ、あの、セリオおねーさん見ませんでしたか？」

だが、その名前を聞いた浩之はかすかに眉をしかめてしまう。だいいち、自分へのあいさつよりも先に、セリオの居場所を知らないかと聞かれて、機嫌のいいはずがない。

「知らねーよ。マルチもあんなやつのは放っておけばいいって」

「で、でも…」

「いいからいいから。それよか朝飯にしたいんだけどな」

「……はい」

こうして浩之は、まだなにか言いたげだったマルチを無理矢理黙らせ、ぶ然とした様子で簡単な朝食をすませるのだった。

ただ、浩之が朝食をとっている間も、マルチはどこか落ち着きがない様子で時々庭の方を見たり、居間の方を見たりしていた。

「ごちささん。…で、さつきからマルチはなにを気にしてるんだよ？」

その答えは大体予想できていただけに、あからさまに不機嫌な声で浩之が尋ねると、マ

ルチもためらいがちに答えた。

「はい……セリオおねーさんが……」

「セリオだって一人で出かける時はあるさ。それに俺たちが心配しても、本人はなにも気にしたりしないって」

やっぱりと言うような表情を作り、呆れる浩之。だが、そこにマルチの声が勢いよく重なった。

「そんなことはありません！」

「なっ……マルチ？」

珍しく反論をするマルチを前にして少々面食らった浩之だったが、マルチの勢いはまだ続いた。

「浩之さんだって、昨日のおねーさんがどこか違うってこと気がついてるじゃないですか」

「そうは言っても、セリオのやつがあんな態度とるから……」

「違います！ 違うんですっ、浩之さんだって本当はおねーさんのことを心配してるんです……」

「へっ！ どうでもいいよ、セリオなんか」

悪びれるつもりはないのだが、浩之の口から出る言葉はセリオに対する悪態しかない。

「だって、だって……」

それに対してまともな返答ができないマルチは、小さく嗚咽を繰り返すばかりである。

「とにかく！ セリオのことは言うな！」

その場の雰囲気にとまらせず、浩之が強い命令口調で言うと、マルチはびくっと体をふるわせた後、涙をこらえながら

「は…い……」

と小さくつぶやいた。

マルチにとつて本意でなくても、浩之に「命令」されては逆らえない。それが絶対と言うわけではないが、少なくともその場では以後セリオの名を口にすることはなかった。

そのころ、セリオは近くの公園にいた。

朝の散歩を楽しんでいるわけでも、買い物やなにかしら用事があったわけでもない。

ただ池のほとりに立ちつくし、池に舞い降りる水鳥を眺めているだけのようで、人であれば「物思いにふける」と言う表現が正しいところだ。

その場を通る人たちに怪訝そうな表情を作らせることが、しばらく続いた後セリオは思い立ったように歩き始めた。

だが、その足の向く先は、浩之とマルチのいる藤田家でも、徹夜でセリオのことを調べ上げた山本のいる研究所でもなかった。

一方、山本はそのころ一通りの資料をまとめ終えて、一息ついていた。

「ふう…」

印刷中の資料を眺めながら、ふと漏れる小さなため息。

「資料はできたかい？」

とそこに長瀬が声をかける。

「ええ、いま印刷中です。あとは会長に連絡を入れるだけです」

「なんだ、まだ連絡してなかったのかい？」

「いくら急ぎとは言っても…。それに専用の連絡手段もあるわけですから」

わずかに意外そうにする長瀬に向かって、山本は苦笑をしてみせる。ちなみにここで山本の言う「専用の連絡手段」とは、セリオとマルチのことに関する来栖川老人直通のホットラインのことで、誘拐事件以来すなわちセリオが新型になってから設けられたものである。

「しかし、ご老人の予定が分かってないんじゃないのかい？」

「主任、それを言い出したら、緊急電話の意味がないじゃないですか」

その時はこのように笑って答える山本だったが、そう言った直後になにかイヤな予感を感じて、すぐに専用の電話を試してみた。

すると、ものの見事にイヤな予感的中してしまったのだ。

「……………出ない」

ひとりごちのような山本の言葉とその表情を見て、思わず長瀬が苦笑いを見せる。

「やれやれ…」

山本がこれまで余裕を持っていられたのは、直通の電話があればこそなのだ。

それが有効でないとすると、一介の研究所員でしかない山本に、来栖川グループ総帥に話をつける手段はないと言ってもいいだろう。もちろんそれは長瀬にとっても同じことが言える。

「じよ、冗談じゃない…」

引きつった笑みを浮かべながら山本が次にとった行動は、本社の知り合いに片っ端から

電話をすることだった。

「自分で用意しておきながら、いざと言う時にコレとは…あのご老人にも参ったね、ホントに」

長瀬も苦笑しながら、自分なりのルートを探ってみたが、いい結果を得ることができず、時間だけがあつと言う間に過ぎてしまう。

結局それからかなりの時間を費やしても、目的とする人物に連絡をとることはかなわなかった。

「…まったく、意外と会長も抜けてるところがあるんですね」

大きなため息まじりに率直な感想をもらす山本。

「本当に困ったものだが…ま、ここはひとつ連絡は後回しにして、セリオの方を先に手配することにした方がいいね」

困っているながらどこか余裕を見せる長瀬がそう言うと、山本は思いたのように時計を見て、それに賛成する。

「つと、そうですね。ぼちぼち時間ですし、今日は休みにしてセリオをこっちに連れてくるようにしますよ」

「ああ。それじゃ私は準備しておくよ」

「お願いします」

長瀬の言う準備とはセリオの綿密な調査（治療と言ってもいいだろう）のためのものであって、そのことをすぐに理解した山本は着替えて出かけ行った。

いつものようにセリオを迎えに行くためだ。

だが、藤田家に着いた山本を迎えたのは困り顔をしたマルチだけだった。

「あれ？ セリオはどうしたんだ？」

いつもなら山本がくることを察知してるセリオが玄関に出るはずだ。しかし、マルチ以外の誰かがいる気配がない。

「……山本さあん……」

困り顔と言うよりも泣きそうな顔になって、マルチがつぶやく。

「…マルチ？ セリオを呼んでくれないか？」

怪訝そうにしながらも、念のためと思つて山本が再び尋ねると、マルチは小さく答えた。

「いないんです………」

「いない？」

にわかに山本の顔が険しくなる。

「はっ……はい……。朝から姿が見えないんです……」

「朝からつて……。マルチ、セリオになにかあったのかっ？」

はからずも山本の口調がきつくなり、マルチがかすかに身をすくませた。

「あっ……そ、その……」

そのマルチの様子に気づいたのか、山本は穏やかな声で訊いた。

「……なにがあったのか、話してくれるかい？」

「は、はい……」

そこでマルチは昨日セリオと浩之がやり合ったことと、今朝気がついたころにはセリオ

の姿が見えなかったことを告げた。

「…なんてこった…こったく！…いや、ここでこんなことを言っても埒があかないな」

普段の山本からは想像もできないほどに苦い表情を見せたかと思うと、山本はおもむろに靴を脱いで、中に入っていくとすぐに二階へと上がっていく。

「あの…山本さん…、セリオおねーさんは…」

それをマルチが追うように後ろから尋ねても、後ろを向くことなく山本が答える。

「端末を見れば、居場所はすぐに分かるさ」

「いえ、そうじゃなくて…」

マルチの返事を受けて、山本は階段を上りきったところでマルチの方を向いて返す。

「ああ…セリオの様子のことかい？」

するとマルチはコクンと一つだけうなずく。だが、山本の答えはそれに対してはつきりとしたものではなかった。

「…もっと早く気がつけばよかったんだ…」

それはマルチに対する返事なのか、自分自身に対する言葉なのか。

「一番分かっていたはずなのに…、いや、どこか俺も一番肝心なことを忘れていたんだよ…きつと…」

山本の自嘲めいた言葉の意味を、皆までマルチに理解することはできなかった。それでも、普段のマルチのように明るく「そんなことないですよー」と言うこともなかった。

「山本さん…」

小さくつぶやくとマルチは、山本の上着の裾をぎゅっとつかんで離そうとはしなかった。そして、その行動に対して山本もなにも言わなかった。そのまま沈黙がつづき、室内には山本が端末を操作する音だけが響いていた。

しばらく後に小さく声を上げたのは山本だった。

「えっ……」

「山本さん？」

「なんで、そこにいるんだよ……」

画面の情報を見つめながら、山本の耳にはマルチの声など届いているようではない。

しばらく呆然とした後、ふと思いついたようにとてつもない早さで端末を操作し始めた。これは、直近の感情制御の様子をざっと調べるつもりだったのだが、すぐに山本の手が止まる。

「…ここでこんなことしてもしょうがないか…」

まるで自分に言い聞かせるようにつぶやくと、山本はすぐに立ち上がり、マルチに向かつて言った。

「とりあえずセリオの場所は分かったから、いまから行ってみるよ。マルチが心配するのは分かるけど、ここは俺に任せてくれないか？」

「え……それじゃ、セリオおねーさんは…」

「大丈夫かどうかは分からない。でも、マルチがそのことで落ち込んでたら、セリオも喜ばないさ」

「はい……。でも、浩之さんには…」

そこでマルチの言葉が詰まる。すると、山本がそれまでとは少し違った苦い表情でつぶやくように答えた。

「彼とは話をきつちりとつける必要があるね……」

山本の苦い表情の中にはかすかな笑みも見られ、それに気づいたマルチが

「あの…山本さん…?」

となにかを尋ねるような声を出したが、それに答えることなく山本はセリオのいる場所へと向かうべく動き出していった。

「とにかく、また後で連絡するから」

短くそれだけを告げると山本は階下へと駆け下りて、さっさと外に出て行ってしまふ。

まだ納得してない様子のマルチを残して山本が向かった先、それはセリオがこれまで「出向」していたところだった。

しばらく自動車を走らせて、目的の場所に着いた山本だったが、いざオフィスに入ろうかと言う時になって、少なからずためらいを感じていた。

セリオがそこにいるのは端末のデータから間違いはない。だが、どのような状態にいるのかは未知数なのだ。もしかしたら最悪の事態もあり得るだけに、ここで自分が乱入するのはやぶ蛇になる場合もある。そう思うと、二の足を踏んでしまうのだった。

(…それでも、ここで悩んでも始まらない、か。こう言う賭けは一番嫌いなんだけど、しょうがないか)

以前にセリオと話した賭けごとと、その勝率のことを思い出しながら、山本が覚悟を決めてオフィスのドアを開け、

「すみません。私、山本と申しますが…」

と山本が受付の女性に告げた時。

「ああ、あなたが山本さんですか？ お待ちしておりました。応接室の方へご案内いたします」

(お待ちしておりました？ …って、なんだ？)

予想外の受付の反応に山本がとまどいを見せると、受付の女性が笑いながらさらに続けた。

「あなたが瀬理ちゃんのお父さんみたいな方、なんででしょう？」

「え？」

「とにかくどうぞ」

なおもとまどいを隠せないまま、山本は受付の女性に案内されて応接室へと入ったが、そこで山本はさらに驚きを見せるのだった。

「ええっ？」

「遅かったわね、山本さん」

それは確かに間違いないくセリオの声で、もちろんその姿も確認できた。だが、それとは違う声が続く。

「意外とここに来るのが遅かったのお。もうちょっと切れる男だと思ってたんだがな」

応接室にセリオとともにいた人物、それは今日の朝からずっと探していた来栖川老人その人だった。

「な……い……一体、どうして……」

「まあそんなに慌てずとも、セリオに説明でもしてもらおう方がいいじゃろ？ それに、この会社の社長でワシの悪友も紹介したらんしな」

「社長？」

とそこまで言われた時、応接室にはもう一人いることに山本はようやく気づいた。そう言えば写真で見たことがある、この会社の社長に間違いはない。

「はじめまして、大高おたかです」

と大高社長が軽く会釈をすると、慌てて山本は深々と返した。

「あ、いえ、度々の失礼：まことに申しわけありません」

「山本よお、そこまで敬礼することもないぞ。道楽で会社をやってるようなたわけ者だからの」

来栖川老人が豪快に笑うと、大高社長も笑ってそれに答える。

「道楽はないでしょう、道楽は」

そこでようやくその場の雰囲気がかめ始めた山本だったが、セリオの姿をあらためて見た時、また驚きの表情を見せた。

「あ…あれ？ セリオ、お前…」

「ああ、髪や耳のこと？」

「ここにいるのにそれはまずいんじゃない？」

怪訝そうにする山本を見て、来栖川老人と大高社長がほぼ同時に笑い出した。それも本当に豪快な笑いである。

「あのね、山本さん」

豪快に笑う二人を目の当たりにして一層困惑する山本に向かって、セリオが微笑みながらしゃべりだした。

その時のセリオの笑顔を見て、山本は直感的に気がついた。
昨日までのセリオとはまた違う、と。

「もう、いいのよ」

「いいって？」

なんとなくセリオの言葉の意味するものが予想できていたが、それでも山本は短く聞き返した。

『『瀬理』はわたしになったの』

「…そうか……」

かなり端折った説明だが、それで山本には十分理解できた。さっき受付で言われた「瀬理ちゃんのお父さんみたいな人」のことも、豪快に笑ってる二人のことも。そして、一番大事なこと……セリオのことも。

*

最初に動きを見せたのは、誰でもない当のセリオだった。

浩之が起きないうちに家を出たのは、浩之と顔を会わせて無用な衝突を避けるためと、対策を練る時間が欲しかったためだ。

セリオ自身が感じている（認知している）問題について、どうすれば解決できるか。あ

るいは、どうすれば解決の方向に動くのか。

もちろんそれを考えるのに、藤田家が不適切な場所とか言うのではないが、さまざまな状況をシミュレートする上に、ただでさえ感情制御に問題点がある

現状では、余計な処理を行っている余裕はない。すなわち、セリオは自らの意思で感情制御システムをほぼ停止させていたのである。

こうして、セリオが導き出した結論は「問題要素の排除」であった。

まず最初に来栖川老人に自分の問題点と、それを解決するための手段を告げ来栖川老人の判断を待つ。

来栖川老人はセリオがそうして自ら相談を持ちかけたことから、事態を重く見て、すぐさま大高社長に連絡をとった。そして、まず三者で話すことになり、来栖川老人も行き先を隠したまま話し合いにのぞんだ。山本たちがいくら探しても見つからなかったのは、このせいである。

三者で話をするまではよかったのだが、その後の処置をどうするかは結論が見えていながら、それを実行するかどうかなかなか決まらなかった。と言うのも、セリオの「問題要素の排除」とは、「セリオの正体を社員全員に明かす」と言うのがまず第一であるからだ。

大高社長は、社員を一人ずつ呼び出す形でやった方がいいと提案したが、来栖川老人はそれをよしとしない。

「セリオのようなモデルが市販される時に、消費者一人一人に訊くわけはいかんからな」と言うのが理由である。

結局は来栖川老人の「ここは賭けに出てもいいじゃろ」のひとことで決まり、セリオは

そのままの姿で会社に向かうことになったのだ。

大高社長にしても来栖川老人にしても、それは一つの大きな賭けだったのは間違いない。最悪のシナリオを想定しつつ、セリオをオフィスに送りだしてみると、結果は見事な大勝となった。

セリオがそのままオフィスに入ってきた時、にわかに気まずい雰囲気の流れていたが、セリオが受付のところで深々とお辞儀をして、

「遅くなりました、藤田瀬理：HM17型メイドロボット『セリオ』です」とあいさつをする、一瞬の沈黙の後に受付の女性が笑顔で答えたのだった。

「じゃ、これからは『セリオちゃん』って呼ばばいいのね？」

幸いにも大高社長と来栖川老人の不安は杞憂にすぎなかったのだ。

受付の女性だけでなく、先日一緒に伝票整理をしていた鈴木もなにも態度が変わることなく、

「んー、俺は『瀬理ちゃん』の方が呼びやすくいいと思うけど？」

と軽い調子で言う、また他から

「どっちも発音じゃ変わらん」

などと声がして、瞬く間に職場全体が笑いが広がっていく。

「ねえねえ、瀬理ちゃんって本当にロボットなの？」

「そーそー。その飾りも付けてるだけで、本当は人間じゃないのー？」

「あれ？ 現行はHM15までじゃなかったっけ？」

「17ってことは、最新型？ これってテストケースなの？」

あちこちからセリオに向かって質問が飛んでくるが、それは嫌みなものではなかった。好奇心と言うのもあるのは確かだが、それらの質問に悪意はない。

「HM17と言うモデル、つまりわたしはまだ一人だけです。それと、わたしは確かにロボットです。ただ、みなさんと同じように自分の意思を持って、それに従って行動できるようになっています」

種々の質問に回答するセリオだが、自分にも心があるとは表現しないところが実にセリオらしいところだろう。

「それって、凄いことじゃない？」

鈴木がひとこと。すると、他の社員たちも賛同するように言う。

「うん、凄いよ、それ」

「そうだね」

そして、その時点でまだ受付のところ立って受け答していたセリオに向かって、鈴木は伝票が綴じられているファイルを見せながら言った。

「で、瀬理ちゃん。いつまでもそこに突っ立ってないで、こっちに來て伝票の整理手伝って欲しいんだけど、な？」

その時。

それまで無表情（感情制御システムが完全に動作してる状態ではない）だったセリオに変化があった。

肩が下がり、かすかに口元が上がる。

自然な動きで、右手が腰に。

そして、それまでの丁寧な口調ではない、普段のセリオの言葉が。

「…しようがない…わ…ねえ…」

とどこどころ言葉が途切れたのは、未だに感情制御システムがおかしいからではなく、それが一気にフル回転をしまったためだ。

一気に感情制御がフル回転…つまり、人間で言えば「感極まった」状態であり、当然ながらその結果も表情の変化として現れる。

制止しようとする意思に従うことなく、一気に動き出した感情の産物。その時、セリオは一筋の涙を流しながら、微笑んでいたのである。

……と、これが山本がここくるまでの大体のいきさつである。

来栖川老人と大高社長それにセリオの三人から、それを聞かされた山本は神妙な面もちをしていた。

「そうですか……」

ことがうまく行った割にはその表情はどこか暗い。来栖川老人がそんな山本の様子に気づき、わずかに不満の色を含ませて尋ねた。

「なんか不満そうじゃな？」

「…今回の一件はこの会社のみなさんに救われた…って言ってしまうえば、それだけですから」

「それはそうかも知れん。だが、そうでないかも知れんのだぞ？」

「え？」

「考えてみる、これまでのセリオのやってきたことを」

「セリオのしてきたこと、ですか…」

「確かにセリオはマルチみたいに従順なメイドロボットではないし、抜け目はないしウソもつく。それでもいくら人間に近いと言っても、長い間に一緒に仕事していた連中が本当に気がつかないと思ってるのか？」

「え、まさか…」

「ああ、社員の何人かはセリオがロボットであることは分かっていたらしい。それでも誰もなにも言わなかったのはどうしてだと思う？」

「自信がなかったからでしょうか…」

山本がそれこそ自信のない答えを言うと、大高社長が穏やかな口調でしゃべり始めた。

「セリオの正体が分かった後、社員の何人かに私が話を聞いたところですね…、彼らは異口同音にこう答えましたよ。『瀬理ちゃんがロボットだろうが人だろうが、楽しく一緒に仕事ができることは同じじゃないか』ってね」

それを聞いた時、山本は思わずはっとした。そう言えば、それに似たようなことを言った人物がいた、と。その人物はセリオではなくマルチのことを言ったのだが、それでも主旨はなにも変わらない。

（そうか…やっぱ、俺は一番分かってなかったのかも知れないな…）

セリオのことを「人」として見ていなかったのは、他の誰でもない自分だったのかも知れない。

自分が一番「ロボットのセリオ」を知ってるつもりで、あるいはそれは真実だったろう。だが、山本は「人」としてのセリオをなにも分かっていなかった。

いや、他人の心の内など、誰にも分からないのだ。それを分かっているつもりでいるのは、傲慢以外の何者でもない。

それきり山本はうつむいて、なにも言わずにじっとしていた。自分はセリオに会わせる顔がない…そんな風に感じていたのだ。

しかし、しばらくの沈黙が続いた後。

セリオが呆れたように笑いながら、ひとことだけもらす。

「まったく…困ったお父さんよね…」

「え…セリオ？」

「事態がここまで進んじやったのは、わたしがみんなに黙っていたからだし、山本さんが気づかなかったのも、わたしが隠してたからだし…」

「セリオ…」

「だから…気にすることは無いと思うわよ？」

言い終えると同時に、セリオは屈託のない笑みを見せる。それはいつもの笑顔だったはずだが、山本はそれまでとは違った印象をわずかに感じた。

なにがどう違うとはつきりとは言えないのだが、ただそれまでのセリオよりも、どこかしら柔らかさを感じさせる、そんな笑みだった。

(セリオの感情制御システムに変化が…いや、そんなことを考えるだけ無意味か…)

ふと浮かんだ疑問に技術者として自答する自分の姿に気づき、山本の口元が自然に上がっていた。

「いや、確かにそうだな…」

セリオに対する返事と言うよりは、さっきまでの自分の姿に対する一つの答えを出したそんな感じの、ひとりごとのような山本の言葉だった。

その言葉の意味がそこにいた三人に通じていたのかどうかは分からない。だが、その後山本の行動を見て、誰もが納得してしまうだろう。

「確かに隠しごとの一つや二つはあった方が、心配しいがあるよ」
笑って山本はそう言ったのである。

すると、セリオも負けずに答えた。

「あら？ わたしの隠しごとは一つや二つじゃないわよ？」

「大いに結構。だけど、調子が悪い時だけはやっぱり早めに相談してくれると嬉しいよ」

冗談まじりに山本が答えると、セリオはそこで少しだけつが悪そうにしながら言った。

「ええ、今度からはそうするわ；ごめんなさい」

その時の表情は実にセリオらしくないものだったが、山本がこれまで見てきたセリオの表情のうち、一番「可愛い」と感じるものだった。

その後セリオはいつもの終業時刻よりも遅くまで仕事をこなし、周りがすっかり暗くなったところに会社の人たちに見送られながら、オフィスを後にした。

山本もその日はセリオと一緒に仕事の手伝いをして過ごし、帰りも一緒である。だが、いざ自分の自動車でセリオを乗せて、動き出そうかと言う時。

「ふう……」

と、横に座ったセリオが小さくため息をついたのだ。

「どうした？」

自動車のメインスイッチを入れながら山本が訊くと、セリオは苦笑いを見せて答える。

「浩之さんのことはどうしようかなって…」

「あ……」

「余計なことをして…、わたしのことを心配してくれたのに怒らせちゃって…どんな顔で会えばいいのかしら……」

本当に困った表情を見せるセリオを見ながら、山本はかすかに笑みを浮かべていた。

サテライトサーピスや各種最新技術を盛り込んだHMシリーズ最高水準を誇るセリオが、「浩之にどう言えばいいのか」と言うことで真剣に悩んでいるのだ。どこか滑稽な感じもあるが、科学の限界とはそうしたものをさすのかも知れないなど、一人で納得する山本だった。

「ま…その、藤田さんのことはちょっとこっちに任せてくれないか？ 彼とは二人で話したいことがあるんだ」

相変わらず顔だけ笑っていた山本はそう言いながら、自動車を走らせる。電気自動車ならではの静寂で心地よい加速を体で受け止めながら、セリオが聞き返した。

「それってやっぱりわたしのことよね？」

「まあね。彼を公園にでも呼び出すから、君はそれを見計らって家に帰ればいい。その後でこっちから連絡を入れるから、そうしたら公園まで…：救急セットでも持って、マルチと一緒に来てくれればいいよ」

セリオの方を向くことなく山本が答えると、セリオは怪訝そうにしてみせる。

「救急セット？ 山本さん、なにするつもりなの？」

それに対して山本は正面を向いたまま、つぶやくように答えた。

「…こう見えても、俺は結構腹を立ててるんだよ、自分自身にね」

そして、わずかだが…ニヤリと笑う。

*

浩之とマルチの元に、山本から連絡が入ったのは、すっかり暗くなったころだった。

詳しいことをなにも知らない二人は、山本の電話と知るなり矢継ぎ早に質問を浴びせてきたが、それらに対して山本は「藤田さんに話があるので、公園まできて欲しい」と答えただけだ。

セリオのことが気がかりでしょうがないマルチも、浩之についていくと言い出したものの、浩之はそれをなんとかだめて一人で呼び出された公園へと向かって行った。

「それじゃ行って来る」

と、山本の呼び出しはセリオに関することだろうと踏んでいた浩之が、まだ仏頂面のまま出て行ってしばらくしてから、玄関で誰かの声があった。

「ただいま」

その声に気づきマルチが玄関まで行くと、そこにはセリオの姿があった。

「おねーさん！」

そして、そのままセリオに抱きつくマルチ。

セリオの方はマルチを優しく受け止め、困ったような笑顔を見せている。

「なあに？ マルチ…そんなに大きなことじゃないでしょ？」

「でっでも、わたし…心配で心配で……」

玄關のたたきに立っていたセリオと、床に立っていたマルチの背丈はほぼ同じくらいになっていたので、マルチの声はセリオの耳元にあった。そして、セリオもマルチの耳元にそっとささやく。

「ごめんなさい。でも、もう本当に大丈夫だから」

すると、マルチが顔を上げて、まっすぐにセリオを見つめるような格好になり、小さいながらもしっかりとした口調で尋ねるのだった。

「…ホントですか？」

マルチのまっすぐな質問に対して、セリオもまっすぐに答えを告げる。

「ええ」

「そ、それじゃあ浩之さんにも！ …あ、でも浩之さんは…」

「いま出かけてるんでしょ？ 山本さんに呼び出されて」

「えっ…そ、そうなんです」

「それじゃ後は準備をして待つだけね」

「準備？ それに待つって…？」

きょとんとして聞き返すマルチに対し、セリオは笑顔を見せて、

「いいから、ね？」

とだけしか答えなかった。

一方、公園に向かった浩之だが、呼び出した本人の姿を入り口付近では見ることがな

かったので、そのまま公園の中へと進んでいった。

すでに日は落ちており、公園の中も外灯の明かりだけになっている。それほど寒くはないはずなのだが、こうした風景を見えると心なしか寒さが増すような気がして、思わず浩之が首をすくめた。

「…たく、山本さんも呼び出したんなら、さっさと姿を見せてくれりゃ…」

とぶつぶつ言い出したその時、外灯の明かりのかけから誰かが現れた。

「あっ……」

小さく声を上げた浩之が、その姿をよく見るとそれは山本だった。

「わざわざすみませんね」

山本がしゃべる。だが、心なしかいつもよりも声が低い。

「いいえ、俺もいま来たところですから。……で、話ってなんです?」

浩之がそう言って山本の方に近づいていくと、山本も外灯の下まで足を進めてきた。そして、明かりの下で山本の姿を確認した浩之は、思わず声を上げた。

「あれ?」

「どうかしましたか?」

「山本さん、メガネはどうしたんですか?」

「ああ、あれは邪魔なので外してるんですよ」

「邪魔?」

その時の山本はメガネをかけていなかったのだ。おまけにそれは邪魔だから外してると言う答えに、にわかに怪訝そうな表情を見せる浩之。

だが、そんなことにも構わない様子で山本が口を開く。

「藤田さん、私呼び出した理由の見当はついてますか？」

「え、ええ、まあ。…セリオのことじゃないかと」

「そうですか。それじゃ、一つだけ尋ねておきますけど、どうしてセリオのことを放って置いたんですか？」

浩之が予想した通りの質問をする山本。非難されてるような印象を受けながらも、浩之はそれに答えた。

「そ…それは…：セリオのヤツが…：余計なことをするから…」

「セリオがいまどうなってるのかも、聞かないんですか？」

山本は質問をさらに続けながら、少しずつ浩之の方に近づいていた。だが、それを特に気にする余裕は浩之にはなく、山本から視線をそらしてつぶやくように答えるだけである。

「……………俺の知ったことじゃないさ。セリオはいつだって、自分勝手にやってるし、山本さんがもうどうにかしてくれようし」

「………そうですか。やっぱり、あなたもなにも肝心なことは分かっちゃいないんですね…。そのくせに、一人で拗ねてるだけで、自分が正しいと思ってる」

山本の言葉には明らかに挑発が含まれていた。

「すっかり親バカの発言だね、山本さん。でも、俺だってセリオのことを気にしてないわけじゃないさ！」

挑発だと分かっているながら、浩之の声が大きくなる。なぜなら、山本の指摘するところは浩之自身も感じていたことで、それをことさら言われたくはないのだから。しかし、な

おも山本は浩之に非難の言葉を浴びせる。

「じゃあなぜセリオをほったらかしにしたんですか。あの時のセリオは、感情制御システムに多大な負荷がかかっている、状態としては極めて良くないものだったのに」

「そんなこと、アンタしか分からないだろ！ 俺は俺でセリオのことを心配してんだ！」

ただでさえ鬱陶しいことが続いていた浩之の言葉が、段々と感情的になってきた。だが、山本はそれを望んでいるかのように、さらに煽る。

「口ではなんとも言えますよ、藤田さん」

「！……山本さん、アンタ真剣に喧嘩売ってんのかよ？」

一瞬にして両者の間に緊張が走る。浩之にしてみれば、自分の優位を確信していたので、威圧するつもりで山本をにらみつけた。だが、山本は一向に引こうとしない。

「あなたがいままで買ってきたような喧嘩とは違って、そんな大安売りはしてませんけどね」

とかすかに笑う。そこには明らかに浩之に対する侮蔑の色が混ざっていた。

「なっ！ その言葉、後悔させてやるよ！」

そこまで言われて止めることはできない。浩之は大声を上げながら、山本に殴りかかって行った。

あそこまで言うからには山本にもそれなりの自信があるに違いない、浩之はそう思って、その一発目は完全に本気を出していた。

そして、その拳が山本の顔に迫っていた時、確かに山本はそれをしっかり目で追っ

た。だが、

「え……」

殴りかかった浩之の方が、思わず声を上げてしまった。

山本はその拳を避けることなく、まともに食らっていたのである。

「っ……」

勢いで少しだけよろめいた山本を見て、浩之は二発目をためらってしまふ。

「お、おい、山本さん、アンタ本当に平気なのかよ？」

カッとなって思い切り殴ってしまったのだから、これは相当きいたはずだ。

だが、山本は体勢を立て直すと、吐き捨てるように言った。

「……これで本気ですか？ だとしたら、いままでは本当に運が良かったんですね、あな

たは」

「なっ……人が心配してりや……」

「……人のことよりも自分の拳の心配でもしたらどうですか？」

なおも山本が挑発するのを受けて、浩之はまた渾身の一撃を与えた。それでも、山本は

少しだけよろめいたもののすぐに立て直し、さらに言葉が続けた。

「……っ、本気を出しなさいって言ってるでしょう？」

「こっ……このっ！」

浩之がここまでコケにされたことなど、滅多にない。

もはや相手を気遣い、手加減することなど浩之の頭から消えてしまい、浩之は山本に向

かっていった。

なぜか山本は浩之を激しく挑発するものの、一向に反撃をしようとしなかったが、そんなことを気にする余裕は浩之にはまったくなかった。ただ若さと勢いで、何度も何度も山本に殴りかかって行くだけだ。

そして、しばらくたったころ。

どれくらい殴ったのか分からないが、浩之は自分の拳の痛みと息切れとで、その手が止まった。

「ハアハア……」

肩で大きく息をする浩之は、力なく両手をダラリと垂らしている。が、山本の方は、顔や腹などをかなり殴られていたにも関わらず、息も乱れていない。ただ、度々顔を殴られていたので、すでに顔が腫れていたし、髪も乱れてはいた。

「……もう終わりですか」

「ハアハア……アンタ……一体……」

まだ息の荒い浩之はまともに答えることもできない。そして、その時だった。山本がゆっくりと自分の拳を握りしめたのは。

「……それじゃ行きます」

「ハアハア……え？」

浩之には山本の言葉の意味がよく分からなかった。だが、次の瞬間には、そんなことはどうでもよくなっていた。

山本の拳が浩之の頬に直撃したのである。

「うあっ……」

不意をつかれたと言えばそうだが、浩之はもろにその一撃を食らってしまい、大きくよろめいた挙げ句に倒れてしまう。

「どうです？」

倒れた浩之を見下ろしながら、山本がさらに言ったが、その一撃はかなり効いてしまっ
たらしい。

「くっ…」

くやしそうにしながらも、浩之はすぐには立てなかったのだ。そして、そんな浩之に向
かって、山本がまたしゃべり出した。

「もう少しつき合ってくれないと、困るんですよ、藤田さん」

「ちくしょ……この…」

また挑発された浩之がなんとか立つと、山本はゆっくりと近づいてきて、今度は顔にめ
がけて一撃。

「ぐあ」

「その程度ですか？ もう少し、反撃を試みたらどうです？」

「くっ…」

山本の言葉に浩之が腕をのぼしてみても、それはまともな攻撃とはならなかった。すで
に拳は痛くてたまらないし、山本の数回の攻撃ですっかり参っていた浩之なのだ。

(ちくしょう、なんでこんなに……痛い喧嘩をしなけりゃいけねーんだよ……)

ただ、どうして自分が山本と殴り合いをしなけりゃいけないのか、そればかりを考えて
いた。

「痛いでしょう、藤田さん」

そう言いながら、山本はまた一撃。

「でもね、セリオやマルチの痛みは、こんなもんじゃないんですよ」

(え……、まさか山本さん……)

浩之は半ば呆然としながら、また山本の拳をまともに食らってしまふ。ただその時になつて、山本がなんでこんなことをしてるのか、少しだけ分かつたような気がした。

「…それを分かっていたいなかったんだ」

山本の言葉はまだ続いていた。しかし、それは浩之に語りかけるのではなく、そう言つてる山本自身への言葉なのかも知れない、と思つた時。

(山本さん…アンタって人は……)

それまで殴られる一方だった浩之が、山本が自分を呼びだして挑発するようなことを繰り返していた本当の理由に気がついた。

「山本さん……アンタ、意外に不器用なんだね…」

浩之がそう言つてニヤリと笑うと、山本はそこで手を止めた。そして、浩之と同じように笑いながら、返す。

「本当に残念ですけどね」

言つた後、二人は少し距離をあけていた。どちらが先にそうしたのか分からないが、しばらくそのままお互いに苦笑いを浮かべていた。

そして、ほぼ同時に二人は動いた。

*

「つてえ……」

浩之は満天の星空を見上げていた。いや、正確に言うとう、倒れたまま起きあがることができずにいて、そのまま天を眺めていたのだ。

「…最後のはなかなか効きましたよ」

と山本の声が浩之よりもかなり高い位置からする。

「完全に負けだよ、山本さん。……でも、なんかありがたいって感じだよ……」

倒れたまま山本に向かって浩之がそれだけ言うと、山本は小さく笑っただけでなにも言わずに、くるりと浩之に背を向けてしまった。

「本当にすみませんね……。私の用件は済みましたから、これで……」

と言うと、浩之の頭の近くに携帯電話を置いて、歩き始めてしまう。

「あ……山本さん……」

「後のことは私よりも適任者がいるので、そちらにお任せしますよ」

浩之の声に振り向くことなく、山本はそれだけ言い残し、去って行った。

（頭を冷やすには……ちようどいいかもな……）

ぽつんと一人取り残され、それはそれで悪くはないと思っていたが、山本が消えてしばらくしてから、先ほど山本が置いていった携帯電話が鳴り響いた。

「ちっ……もしもし？」

放って置くわけにも行かないと判断した浩之が面倒くさげに出ると、電話の相手はセリ

オだった。

『浩之さん？』

(な、なんでセリオが……そうか、さっき山本さんが言ってた適任者って……)

『大丈夫なの？ 山本さんはあなたが倒れてるって言ってたけど……』

セリオの声からは心配してる様子がかがえる。それは昨日のやり取りがウソみたいに思えるほどで、なんとなく安心してしまう。

「ははは、倒れてるってんじゃないかって、満天の星を眺めているだけさ」

『相変わらず負けず嫌いね』

「……やっぱり、セリオはなんでもお見通しか……」

『ごめんなさい、また余計なことを言ったみたいね』

思わず浩之が漏らしたつぶやきだったが、それに対するセリオの反応は浩之にとっては思いもよらなかった。

「あ、いや、そうじゃないんだ。その……なんて言うか………悪かったよ」

『……』

「セリオ？」

『とにかく、そっちに行くから待っててね』

「あ、おい！」

浩之がそう叫んでみても、電話はすでに切られていた。

「……あまり見せたくない格好なんだけど……そんな強がり言ってる状態でもないか」

なんだかんだと言っても、未だに立ち上がれない自分の状態を見て、思わず苦笑をして

しまう浩之だった。

そして、しばらくしたころ。

浩之の耳にセリオとマルチの声が届いた。

「浩之さん！」

「大丈夫でしたかー？」

駆け寄って来ると同時に、セリオが浩之の上体を起こしてくれた。

「悪いな、二人とも」

浩之が謝ると、マルチは泣きそうにしながら、

「うわぁ…顔がボコボコになってます…」

とそっと手を当ててくる。

「痛っ…」

「あ、す、すみません…。でも、山本さんもひどいです…。」

浩之が痛そうな表情を見せるとマルチはすぐに手を引っ込めて、持ってきた救急セットを開いて、とりあえずの手当を始めようとする。

「いや、山本さんはひどい人じゃないよ、マルチ…」

マルチの治療（と言っても傷口の消毒くらいだが）を受けながら、浩之は穏やかな調子で言うど、浩之の上体を支えていたセリオも口を開いた。

「そうよ、マルチ。ただちよっと心配性だけどね」

「…でも、やっぱり…こんなこと…。」

それでもやはりマルチにしてみれば、浩之をボコボコにされてしまったことの方が重大

なごちらしく、釈然としないまま浩之の治療を続けた。

マルチによるごく簡単な応急手当がすんだころ、浩之はセリオの支えなしでもいられるようになり、試しに立ち上がるうとしてみる。

「よっ……とっ……とっ……」

まだ足下がおぼつかないようではあるものの、支えなしでもなんとか立っていられるようだ。

「本当に大丈夫ですか？」

「ふう……なんとか平気だろ？」

心配そうに見守るマルチに、やや自信なさげに答えた浩之だが、さすがにこの状態で「平気平気」などと強がりには言えなかった。そんな風になんとか立っている浩之に向かって、ふとセリオが声をかけた。

「あ、そうだ。浩之さん、寒いでしょ？」

同時にバサッと浩之の肩からコートをかけながら、そのまま浩之の体を支えるようにしている。

「あれ？」

セリオがかけてくれたコートを見て、浩之は不思議そうな声を上げた。

「こんなコートあったっけ？」

すると、セリオは浩之の顔に自分の顔を近づけながら答えた。

「ちよっと早いけど、クリスマスプレゼント」

「え？」

「この前に街で見かけて、浩之さんに似合いそうだと思ってたの」

そう言って間近にあるセリオの笑顔は、久しぶりに見るような気がした。

「そっか……暖かいよ。ありがとな、セリオ」

「マルチはマルチでちゃんんと別のものを用意してるから、期待してね」

「あ、セリオおねーさん、それは言っちゃ駄目ですよっ」

「はいはい、分かってるわよ」

「楽しみにしてるよ、マルチ」

いつの間にか、すっかりいつもの姿に戻っている三人。それをことさら意識することもなかったが、それでも浩之はなんとなく、セリオの笑顔がいままでとは微妙に違うことに気がついていてた。そして、それは決しておかしなことではなく、ごく自然なことであることにも。

(…なんにも分かつちやいなかつた…か。確かにそうだよな、俺も……)

山本の言葉をそっと心の中で繰り返しながら、浩之はまたセリオとマルチの笑顔を見つめた。

「や…、なあに？」

「どうかしたんですか？」

わずかに照れるセリオときよとんとするマルチ。これまでの浩之なら、それも深く気にすることはなかっただろう。だが、いまはちよつと違う。

「いや…俺はやっぱり果報者だなんてね…」

決してお世辞などでない本心からの言葉を、そのまま真顔で浩之は口に出した。そして、

「な……や、やあねえ。浩之さんたら、頭でも打ったのかしら？」

と実に期待通りの反応を見せるセリオと、

「はいっ、わたしも浩之さんのお世話ができて、嬉しいですよー」

とこれも予想通りの反応を見せるマルチに満足して、

「はははははっ…」

とその場で大笑いしてしまう浩之だった。

*

さて、後日談である。

山本は浩之と「話し合い」をした翌日に、顔に包帯を巻いて出社したかと思うと、半日で帰宅。それ以後仕事納めの前日まで寝込んでいたと言う。そのおかげで、仕事の予定がひっ迫してしまい、正月休み返上で研究所で一人仕事をする羽目になった。

浩之はその後、セリオに軍資金を提供してもらい、「クリスマスには自宅でパーティを」と言う約束を二十五日だと思ひ込み、クリスマススイプには予定外の飲み会に参加。セリオとマルチの約束を完全にすっばかしてしまう。その結果、二十五日には二日酔いの体でケーキ丸ごとと料理すべてを食べさせられる羽目になった。

セリオはひとまず長瀬の手によって精密な検査を受けたが、異状所見なしと言う結果に至り、特に変わりはない。マルチも然りである。

ただ、検査の時に長瀬は次期モデルについての方針をセリオに話していた。

「ああ、そうだ。これはいずれ発表があると思うんだが…」

「なにかあったの？」

「まあね。次期モデルは『感情制御システム標準搭載』ってことで決まりだよ」

「へえ…」

「あのご老人が鶴の一声で決めさせたと言う噂もあるがね。それに大高社長とご老人の二人で、またなにやら楽しいプロジェクトを考案中だとか聞いたが」

「それじゃ、これからは大変になるわね？」

「研究所としては、そう変わりはないよ」

「うん、そうじゃなくて。それってつまり、わたしみたいなのが增えるってことなんですよ？」

「まあね…」

その時の長瀬の表情は、いつもの飄々としたものではあったが、額には一筋だけ冷や汗があったと言う。そして、長瀬は内心こう思っていた。

(こんな娘ばかりで、私も山本君も苦勞は絶えないねえ…)

いずれにしても、感情制御を搭載したモデルが一般的になるのはまだまだ先のことである。しかし、そんなことはあの二人には関係ない。

そう、それが認められようが認められまいが、藤田家に住まう人々とそれを取り巻く人々の態度は変わらないのだ。

これまでも、そして、これからも。

『新ロボ耳4』 番外編

「クリスマスはイブの夜に」

それは十二月二十五日のこと。

昨夜遅くまで大学の友人と騒いでいた浩之が目を覚めたのは、もうじき昼になろうかと言う時間だった。

「ふあ…まだ頭が痛いな……」

まだ酒が残っている頭を抱えながら浩之が居間に姿を現すと、ふと食卓の上に目が行った。

「あれ？」

と、思わず手を頭に当てたまま、食卓の上にあつた物を凝視してしまう。

「ケーキ？ それにツリー…ってそうか、クリスマスだもんな…」

一人で納得する浩之の目の前にあつた物は、恐らくセリオが作ってくれたであろうケーキ（木の形を模した「ブッシュ・ド・ノエル」と言う物だった）と、恐らくはマルチは飾り付けをしたであろう小さなツリー（不格好ながら浩之の姿を模したマスケットがついていたりする）だったのだ。

「普通ツリーのてっぺんには星がついてるもんだろうけどな…」

と浩之が笑いながら、いすに腰をおろすと、ふと後ろから声がかかる。

「あら、浩之さん、ずいぶんとごゆっくりですこと」

言葉の内容もさることながら、その言い方にもたっぴりと皮肉が込められている。

「う……」

浩之が声のした方を見ると、そこには大方の予想通りセリオの姿があった。

さらに、セリオの背後にマルチもいるようだ。

「せ、セリオ…その言い方は……」

「あら？ そんなにきつい言い方になってましたか？」

普段よりも丁寧なセリオの言葉遣いだが、その裏にはとりつく島も与えないほどの厳しさがある。

「あ……あの……セリオさん……？」

なだめようにもどうしたらいいのかさっぱり分からない浩之が途方に暮れてると、セリオの後ろにいたマルチが泣きそうな顔で言った。

「あの……浩之さん、昨日は…一体どうしたんです……」

「え？ 昨日って……そりゃ飲み会が……」

未だに事態が飲み込めない浩之がぼそつと答えると、そこにセリオの声が重なった。

「飲み会…さぞ楽しかったでしょうね、浩之さん」

「お、おい…セリオもマルチも一体どうしたってんだよ……」

「…昨日、セリオおねーさんもわたしも待ってたんですよ……」

「え？」

その時になって、浩之はなぜか怒ってるセリオとなぜか泣きそうなマルチの理由が少しだけ見えたような気がした。

だが、その結論は浩之にとっては嬉しくないものである。

「昨日待ってた…って、まさか？」

浩之の額に汗がひとすじ。

「約束したじゃないですか…クリスマスは家でパーティーしようって…」

マルチの泣きそうな声に、さらに冷や汗が増える。

「…って、もしかして…」

「昨日はぜひぶんとお楽しみだったみたいですわね、浩之さん」

にこりと笑うセリオ。それは決定打と言える一撃だった。

「あ…ああ…」

もはや浩之は蛇にいらまれた蛙のように、だらだらと冷や汗を垂れ流すだけである。

「で、でも…昨日はクリスマススイブじゃないか…」

滝のような汗を流しながら、必死の形相で反論を試みた浩之だったが、それに対してセ

リオは「フツ」と小さく笑って答える。

「あのね、浩之さん。本来クリスマスってのは、いまの暦で言うと二十四日の日没から二

十五日の日没までなのよ（旧約聖書の時代だと、一日の始まりは日没からなのだ…）と

作者は記憶してる」

「な…そ…」

そんなことを言われても、知るわけじゃないかと、言いたかったのに浩之の口か

らはまともな言葉は出なかった。

「わたしもセリオおねーさんもずっと待ってたんですけど…」

とまたマルチの声。

昼前まで寝てたくらいなのだから、浩之の帰りはかなり遅い時間であったことは察していただけるだろう。

「マルチ…お前まで……」

いつもなら味方に回ってくれそうなマルチまでが浩之を責めるような態度を見せるに至って、浩之もついに観念した。

「……悪かったよ……ホントに」

「誠意が感じられないわね」

「ははは……勘弁してくれよ……」

ただでさえ飲み過ぎで頭が痛いのに、これ以上の問題は勘弁して欲しいと言うのが浩之の本音だったが、そもその原因は自分にあるのでそれも強く言えないのが情けない。

すると、セリオが小さなため息をついたと思ったら、すぐに笑いながら言った。

「もう…本当に浩之さんたら、しょうがないんだから……」

その笑顔からはさつきまでの不機嫌さは感じられない。

「せ、セリオお、分かってくれるか？」

「ええ、過ぎたことを言ってもしょうがないものね」

とまたにっこりと笑うセリオ。

「そっかあ、分かってくれたか……」

セリオの様子を見て、すっかり安心した浩之だったが、次のひとことでそれが大きく変わる。

「それじゃ、そのケーキと昨日用意した料理の全部を食べてね（ハート）」

「え……………」

浩之が笑顔のまま凍るのに要した時間は、一秒もかからなかった。

「そうですね、それじゃわたし、お料理温めなおしますねー」

セリオの言葉をそのまま受けて、マルチが嬉しそうに言った。そして、それによって、浩之は顔だけでなく体までもが完全に凍りついていた。

(…二日酔いにケーキ丸ごと食べ？ そればかりか料理を全部平らげる?)

なにも答えずに固まっている浩之をよそに、マルチは料理の皿を冷蔵庫から次から次へと出しているし、セリオはケーキを食べるためのナイフとフォークを用意してくれる。

「取り皿はいらないわよね？」

浩之の前には、空腹あるいは二日酔いでない状態ならば喜んで平らげるであろう豪勢な料理の皿が数枚と、ケーキがあった。そして、いつの間持たされたのか、手にはナイフとフォークが。

「さ、どうぞ、浩之さん」

「温かいうちに食べた方がおいしいですよー」

笑みを浮かべたまま凍りついている浩之に、セリオとマルチがそれぞれ言葉をかけた。

ここここに至ってはもはや覚悟を決めるしかない。

「……………やあ、ほんとうにおいしそうだねえ…………」

と、固まった手がようやくすかすかに動き出した時。

セリオが小さく「あつ」と声を上げた。

もしかしたら許してもらえるのかと、一縷の望みを託した浩之だったが、それは儚い夢

だった。

セリオは「ごそごそとなにかを取り出してきたかと思ったら、「ポンっ」と一つだけクラッカーを鳴らして、笑顔でこう言った。

「メリークリスマス！」

だが、それは浩之の耳にはまったく届いていなかった。

この後、浩之は本当に料理とケーキを全部平らげるまで解放されなかったのだが、そのおかげで翌日まで胸やけに悩まされたと言う。……合掌。

.....
こっちの番外編が先に出てしまいましたが、これは『新ロボ耳4』の後日談にあたります。

.....
1998/12/25 23:55
.....

.....
あとがき

ほとんどがシリアスな展開ですが、ラスト部分でなんとなくいつもの『新ロボ耳』になつたような気がします。

さて、これまで何本かセリオの話を書いてきましたが、そろそろ「こんなセリオを書いてみたい」と言う欲求が満たされてきたみたいです。

思い返せば、セリオの「おねーさん仕様」と言うアイデアはかなり早い時期（拙作『POO HOT』を書いたころ）に浮かんでいたもので、多くの人のご支持をいただいたことは創作の励みになりました。ただ、それと同時に、私の書くセリオは「セリオであつてセリオでない」とも言えるもので、私が調子に乗れば乗るほど不快に感じる方がいたかも知れません。もっとも、私が書いていたのは「Celio」であつた「Senio」ではないのだから、当然なのですが。

ともあれ、今回の作品は自分の中では「完結編」と言う位置づけになっています。この先のセリオたちの物語はどうなるのか、それは私にも分かりませんが未来に向けての明るい材料は今回の話で幾つか提供したつもりです。ですからこの先は皆様でお考えください。もし可能であれば、それら皆様の「セリオ」を私にも見せてください。

それでは、今後のセリオたちの未来に期待して……。

『新・おねーさんの耳はロボの耳4』

1998/12/26 初版

1998/12/27 一部修正

PDF書式変更:2016/05/11